

# 光輝の

～変態絶頂に堕ちるフタナリ母娘～

# アルカデオ

有機企画 イラスト:ねいさん

18  
未 満

二次元ドリームノベルズ



# CHARACTERS



ASAUNI  
ASAHI

やくも あさ ひ  
**八雲 朝光**

アルカナサニーに変身してアビス  
ゲートと戦う正義のヒロイン。

## CONTENTS

第一話 輝きのアルカナ戦士  
004

第二話 屈辱の赤ちゃん体験  
049

第三話 母娘オナホール対決  
081

第四話 恥辱のフタナリ謝罪配信  
110

最終話 永遠の快樂と堕ちた正義  
142

エピローグ 終わる世界のフタナリ快樂  
180

**ARCANA  
DUO**



HAKUHO  
KAEDE

やくも かえで  
**八雲 楓**

アルカナムーンに変身する正義の  
ヒロイン。朝光の母親。



CIEL EL LOTUS

**シエル・エル・ロータス**

アビスゲートの女幹部。

## 第一話 輝きのアルカナ戦士

空を割る鈍色の亀裂、それがすべての始まりだった。

西暦二〇四二年、次元の壁を破り「アビスゲート」と名乗る集団が地球に降り立った。人間に近しい姿を持ち、地球の言語を瞬く間に理解する高度な生命体。彼らとの交流が地球文明に革新をもたらすと信じ、友好的に迎え入れた人類だったが、その期待は脆くも打ち砕かれた。

アビスゲートの目的は友好関係を築くことではなく、人類を支配することだったからだ。人間の三倍の身体能力を持つ戦闘員。それらを束ねる怪人という部隊によって、いくつもの都市が甚大な被害を受けた。

しかし、人類もただ手をこまねいているわけではなかった。

アビスゲートの脅威に備えていた一部の科学者たちは、「ライズジェム」と命名された宝石形の身体強化デバイスを開発していたのである。

適正のある女性にしか扱うことはできないが、ライズジェムの使用者は怪人と互角以上の力を持つ、アルカナの戦士に変身することができる。

地球の命運は、宝石に選ばれし彼女らに託されたのだ。





富士山の山頂にそびえ立つ逆三角錐の要塞。ピラミッドを逆さまにただ置いたような、この世の物理法則を無視した光景は、アビスゲート日本侵略支部によってもたらされたものだ。

半年前から登山客どころか、半径数十キロには野生動物の気配すらなく、焼け焦げた戦車や戦闘機が周囲に打ち捨てられている。

この状況で要塞に近づく命知らずなどいるはずもなく、ゴウゴウと吹きすさぶ風の音だけが黒色の外壁を撫でていた。

しかし、今日はいつもとは様子が違っていた。麓<sup>ふもと</sup>まで届くほどの激しいアラート、それは荒れ果てた富士の登山道を、頂上へ向けて疾走する二つの影に向けられたものだ。

「ありや、気づかれちゃったか。作戦変更する?」

「作戦はこのままよサニ。最短距離で正面突破、でしょ?」

「そこなくちゃ。道を開くのは任せて!」

二つの影は顔を上げると、地面を陥没させるほどの勢いで大きくジャンプした。瞬く間



に要塞との距離が縮まっていく。

外壁に衝突しそうになる寸前、サニーと呼ばれた少女はニカッと笑うと、飛び蹴りをするように足を前に突き出した。

次の瞬間、ドゴンツと爆音が鳴り響き外壁に大きな穴が開く。砕けた鋼材が落石のごとく周囲に降り注いだ。

「バ、バカケオ!? 支部の多重防壁が一撃ケオ!?」

「あ、あり得ねえでケオ!」

おかしな語尾で慌てふためくのは、ケイオスと呼ばれるアビスゲートの戦闘員だ。全身黒タイツで顔の部分にはマーブル模様の仮面を着けている。

ちょうど訓練中だったのか、サッカーコートほどもある広いスペースに、何百人ものケイオスが集まっていた。

二つの影は崩れた外壁の上に立つと、右往左往する戦闘員に向かって言い放った。

「悪を砕くは炎の拳! 燃えるハートは一億度! アルカナサニー、紅蓮に可憐にただいま参上!」

紅蓮のポニーテールをなびかせ、人差し指をビシッと突き出しポーズを決めるのは、太陽のような印象を受けるアルカナの美少女戦士だ。



赤を基調にしたアイドル系のコスチュームは、フリルやリボンで彩られ、張りのあるバストの胸元には山吹色のライズジェムが輝いている。

キュッとくびれたウエスト、露出した臍へそから目線を下げれば、マイクロミニスカートとスパッツが少女のヒップを爽やかに彩っていた。

「悪を撃つは煌めく閃光。私の光は如何いかなる敵も逃さない。アルカナムーン、優美に無敵にただいま参上よ」

続けて口上を決めたアルカナの美少女戦士は、ブロンドのウェーブロングヘアを月明りのように煌めかせていた。

コスチュームのデザインはアルカナサニーと同じだが、彼女は白を基調にしている。メロンのごとく重量感のあるバストは、はち切れんばかりに存在感を主張し、なだらかなウエスト、ミニスカートに収まりきらない巨尻がブルンツと弾む。

その容貌は美しさの中にも大人の余裕があり、敵地だというのに僅わずかな動揺も感じさせない。

隙のない構えからはベテランの貫禄が感じられた。

「戦闘態勢！ お前ら集まるケオ！」

「『ケオス！ ケオースッ!!』」



「うわっ、めっちゃ出てきたんだけど」

「さすが日本侵略の要といったところかしら」

リーダーと思われるケイオスが指揮を執り、五百を超える黒タイツの大群が二人をぐるりと取り囲む。

この数は何十体もの怪人を倒してきた美少女戦士といえども、決して油断はできない状況だ。

「幹部の前哨戦ね。サニー、怖い？」

「全然。だってママと一緒にだし」

「この姿の時はアルカナムーンでしょ。……やっぱり緊張してるわね」

「あっ、ごめん。ふう……すーはーすーはー。大丈夫、絶対に足手まといになんかならないから」

母にして先輩戦士であるアルカナムーンにジト目で見られ、アルカナサニーは深呼吸してドンと胸を叩いた。

アルカナの戦士に選ばれてまだ日が浅い彼女は、経験不足を勇気で補おうと唇を固く引き結ぶ。

「よしっ、行こうムーン。どれだけ敵がいたってわたしたちは負けないんだから！」





放たれた矢はすべてケイオスの脳天を貫いていた。

「どんどんいくわよサニー」

「りょーかい！」

爆炎と光の矢が黒い群れを吹き飛ばし、ケイオスたちは瞬く間に壊滅した。二人は胸やお尻に付いた汚れをパンパンと払う。

柔らかな肉果実がむにゅりと揺れた。

「これで全部ね。今の戦い方って何点くらいだった？ 採点お願いします先生！」

「誰が先生よ。まあ八十点といったところかしら。強くなったわね」

「やった！ 最高得点こーしん！」

先輩戦士であるアルカナムーンに褒められ、アルカナサニーはピョンピョンとジャンプする。

未熟な自分でも力になれることが嬉しい。だが、本番はここからだ。

「数で押し切ろうなんて甘すぎよ。下っ端に任せてないで姿を見せなさい！」

「わたしたちは決着をつけにきたの。小細工は時間の無駄よ」

アルカナサニーが大声で叫ぶと空間に亀裂が生じ、日本侵略支部を統括する、アビスゲートの幹部が姿を現した。

「フフ、歓迎はお気に召さなかったようね」

空中に浮かんでいるのは、水色の髪をショートヘアに切り揃え、黒のドレスを着た少女だ。外見は十歳程度で、学校の初等部に通っていてもまったく違和感がないだろう。

しかし、彼女こそがアビスナンバーズと呼ばれる十二人の幹部、その第四番、シエル・エル・ロータス。その実力は戦闘員などとは比較にならない。

「何度も戦ったけど、貴女たちから来てくれるのはこれが初めてね。嬉しいわ」

「正確にはこれで五度目よ。今日こそ覚悟しなさい」

合成怪人を生み出す能力を持つシエルと、二人は互いに相手の命を奪う寸前まで戦い合った仲だ。

何度も着かなかった決着を今こそつけようと、アルカナムーンは弓を構える。矢の先端が額に照準を合わせるが、シエルに動揺の色は見られない。

「ああ……いい殺気。ソクゾクしちゃう」

「キモいこと言っていないでかかってきなさい！ あんたをブン殴りたくて拳がメラメラ燃えてるわ」

「相変わらずせっかちねアルカナサニー。いいわ、なら私のとおきを見せてあげる。出番よ、ヘカトンケイル」



「ゴル……ゴルルル……」

シエルが指を鳴らすと、先程よりも大きな亀裂が空間に生じ、中から合成怪人が姿を現す。

ヘカトンケイルと呼ばれた怪人は、体長十メートルもある巨体で、騎士のように全身を鎧と兜で固めていた。

ただし、一般的な騎士のイメージとは異なる点がある。それは胴体から生えた百本の腕。腕のタイプはケイオスから、一角ライオン、死神クラーケン、メタルビートルと、様々な怪人のものが不規則に生えている。

その異様な姿にさすがの美少女戦士も後ずさった。

「ヤバそうなのは見た目だけ。ってパターンじゃなさそうね」

「ヘカトンケイルは掛け合わせる細胞の数が多すぎて、小動物並みの知性しか持てない欠陥怪人なの。その代わり戦闘力だけは私の怪人でも歴代最強よ。さあ抗ってみなさい」

「ゴルルウ……！」

「来るわよサニー！」

アルカナムーンが叫ぶと同時に、ヘカトンケイルの拳が襲い掛かる。訓練用に強化コーティングされた床がすり鉢状にへこみ、粉塵が舞い上がる。

「あつぶな！　どういうパワーしてんのよ！」

「あの威力だと掠<sup>かす</sup>めるだけでも危険ね。出し惜しみはなしで一氣に決めるわよ」

「りょーかい！」

間一髪拳を回避していた母娘戦士は、ヘカトンケイルの左右から攻撃を仕掛ける。胸元の宝石がより強く輝いた。

「フレア・ラッシュュッ！」

「アルテミス・レイン」

炎を纏った拳の連打と、雨のように降り注ぐ光の矢が怪人の巨体を直撃する。しかし、ヘカトンケイルは無反応で、鬱陶しい羽虫を払うように腕を振るった。

「ゴルフウウウウウウウウウッ！」

「きゃあっ！」

「あぐっ、ううう……！」

ただ腕を振るう、それだけで強烈<sup>きょうれつ</sup>な突風が発生する。その衝撃で二人は壁際まで吹き飛ばされてしまった。

母娘揃って豊富なバストをブルンツと弾ませながら、床に身体を打ち付けられる。破れた衣装の間から、脇腹やスパッツに包まれた鼠径部が、チラリと見えた。



「ゴル、オオオオオオオオオオオオオッ！」

「これ……やばっ……！」

「くっ、なんて力なの……！」

百の拳から氷や稲妻、酸、鉄杭など様々な属性の攻撃が放たれる。アルカナサニーは炎の壁を生み出し、アルカナムーンは光の盾で辛うじて攻撃を凌いでいた。

衝撃で背にしている壁にヒビが入り、コスチュームがさらに破れていく。胸の谷間が強調され、裂かれたスパッツからは太腿が見える。

「……ムーン、あれやってみない？」

「あれって、特訓中の？ 無理よ。まだ私たちの力の波長が合わないわ」

「このままじっとしてたってアイツには勝てない。だったらぶっつけ本番決めるしかないよね。大丈夫、わたしとムーンならきつとできるって！」

「——成長したわねサニー。いいわ、やりましょう。タイミングはあなたに任せるわよ」  
「うんっ！」

アルカナサニーの右腕、アルカナムーンの左腕が、胸元のライズジェムと同じように、キラキラと山吹色に輝く。

アルカナサニーが提案したのは、特訓中の合体技だ。成功させるには互いのエネルギー

の波長を寸分違わず合わせる必要があるため、暴発を危惧して実戦ではまだ使ったことがない。

常識的に考えれば自殺行為の危険な賭け。だが、アルカナサニーには失敗するイメージなどまったくなかった。

「あら、なにか奥の手でもあるのかしら。させないわよへカトンケイル」

「ゴル、ルル、ゴルグルルウウウウウウウッ！」

「っ……ううううっ！」

タイミングが合うまでアルカナムーンが光の盾で攻撃を耐える。一枚目の盾が碎ければ二枚目、二枚目の盾が碎ければ三枚目と、息をつく暇もなく盾を追加していく。

だが、それをもって後数十秒だろう。

（アルカナの戦士に選ばれて、ママと一緒に戦ってきた。これまで訓練で、戦いで学んできたこと、そのすべてをここに賭ける！）

アルカナサニーの想いに反応するように、輝きが強さを増していく。アルカナムーンも同様にエネルギーの波長を高め、その力が同じになった瞬間――。

「ムーン！ いまっ！」

「ええっ！」



「合体ッ！ フレア・アルテミス・エクストリームデュオッッ！！」

声が重なり、右腕と左腕が突き出される。炎と光、二つのエネルギーが螺旋状に渦を巻き、凄まじい力の奔流がヘカトンケイルを直撃する。

幾筋も閃光が走り、轟音が鳴り響いた。

「ゴ……ゴア、アゴオオオオオオオオオオオオッ！！」

「——ッ!？」

鎧の胴体部に大きな穴が開き、ヘカトンケイルは断末魔の声と共に爆発した。切り札をたった一撃で撃破され、シエルも瞳を見開く。

金属と肉の溶けた匂いが辺りに充満していった。

「今の攻撃は百点満点よ。もう私も超えられちゃったかしら」

「ムーンが合わせてくれなかったら絶対失敗してた。わたしたち二人で百点だって！」

アルカナムーンは微笑んで、アルカナサニーはニカッと笑ってハイタッチする。パンツと響いた音は、長い戦いに終わりを告げるようだった。

「わたしたちの勝ちね。まだやるつもり？」

アルカナサニーはボロボロになったスカートを引き千切り、シエルを睨む。スパッツで引き締まった桃尻が露出する。

「悔しいけど降参するわ。まさかヘカトンケイルが負けるなんて思わなかったもの。控えの怪人じゃもう相手にならないわね」

「ならこの要塞ごと日本から引き上げなさい。今すぐによ」

バンザイポーズで降参宣言するシエルに、油断せずアルカナムーンは矢を向ける。息を吐くように虚言を繰り出すこの少女を、ベテランの戦士が信用するはずもない。

「信用ないのね。そう怖い顔をしなくてもいいのに」

「侵略者の言葉を信じるほど能天気じゃないわ。急がないと私が解体するわよ」

「そうそう。この場でボコボコにされないだけ感謝しなさいよね」

「貴女って本当に乱暴ね。まあ、その方が屈服させ甲斐あるんだけど♥」

「? なにを言ってる——」

シエルの言葉に違和感を覚えた次の瞬間、アルカナサニーとアルカナムーンの視界がグラリと揺らいだ。

両足から力が抜け、その場で膝をついてしまう。

「か、身体が動かない……?」

「ようやく効いてきたわね。ヘカトンケイルの真の力が」

「これはまさか……っっ!」



爆発したヘカトンケイルの残骸から、ブスブスと紫煙が立ち昇っていた。金属と肉の焦げた匂いで気づかなかったが、この症状は――。

「毒ガス、ね」

「ご名答。ヘカトンケイルの血は流出した瞬間から気化して、毒ガス化する性質があるの。平気なのは事前に解毒剤を飲んだ私とケイオスだけ。初めから勝敗に意味なんてなかったのよ」

「この卑怯者！ 怪人を使い捨てるつもりだったのね！」

「私の作品をどう扱おうと私の勝手よ。アビスゲートに人間の価値観を問わないでくれるかしら。フフッ、心配しなくても命までは奪わないわ」

「殺すつもりがない？ 一体なにを企んでいるの……」

「貴女たちにはまだ利用価値がある。今はそれだけ理解していればいいわ」

「待ちなさい……わたしはまだ負けてなんか……」

立ち去るシエルの姿と駆け寄ってくるケイオスたち。それを境にして、アルカナサニーとアルカナムーンの意識は、混濁した世界に沈んでいった。



アビスゲートが地球侵略を開始して半月が経った頃。アルカナサニーこと八雲朝光やくもあさひの通う学園にも怪人が出現していた。

「キャアアアアアアアアッ！ か、怪人!？」

「誰か先生を呼んできてくれ！」

「バカ呼んでどうすんだよ！ 逃げるぞ！」

「ほお、美味そうな人間が集まってるじゃねえか。街をぶっ壊す前に腹ごしらえだな」

獣タイプの合成怪人、一角ライオンが舌なめずりをする。体育の授業中だった生徒たちは、パニックになって、我先にと逃げだした。

「ッ……痛っ」

「——優香ゆうか！ 大丈夫!？」

「うう、足が……」

他の生徒に押され、朝光の友達が足をくじいてしまった。ドシンドシンと足音を立てて、すぐそこに一角ライオンが迫る。

「自分からエサ志望とは助かるぜ。さて、頭と脚どっちから喰うかなあ」

「お願い、朝光だけでも逃げて！」



「あきらめるの禁止！ 絶対に二人で助かるんだから」

言葉では強がっていても状況は絶望的。人生で初めて味わう死の恐怖に、少女の頬を冷たい汗が伝う。

（わたしにもっと力があればあんな化け物なんかやつつけちゃうのに。——あれ？ この間ママにもらった宝石が光ってる？）

アルカナの戦士の変身アイテム、ライズジエムは持ち主の感情に反応し、その身体能力を何千倍も増幅させる。

そして宝石が山吹色に光り輝くのは、戦士の資格があるということ。

「な、なんだそのエネルギー。見たことねえぞ」

（力がどんどん溢<sup>あふ</sup>れてくる。わたしに戦<sup>あ</sup>えてこと？）

「クッ、なんだかわからねえが死ねえッ！」

一角ライオンの爪が五本の刃となって迫る。心臓を貫かれるまでのコンマ一秒にも満たない時間、朝光は胸の内から湧き出た言葉を紡いだ。

「光輝、転身！」

アルカナサニー初めての变身。後にアルカナムーンと二人でアルカナデュオと呼ばれる美少女戦士の誕生であった。



「んっ、んうう……」

（わたしは……シエルに負けて……）

毒ガスの効果が切れ、アルカナサニーはまぶたを開く。頭の芯はまだクラクラとアルコールを飲んだように揺れているが、気合で覚醒を促す。

（そうだ……気絶した後捕まったんだ。とにかくここから逃げないと）

キョロキョロと周りを見回す。部屋の壁を這う無数のコードや、得体の知れない薬品の並んだ棚から推察すると、ここは実験室のようだ。

手足の拘束を確認しようと視線を自分に向けたところで、アルカナサニーの酔いは完全に覚めた。

（……え？ な、なによこれ!？）

美少女戦士の身体は粘着シートに張りつけられ、ガニ股で両腕をバンザイしたポーズで拘束されていた。ゴキブリ捕獲シートに背中がくっついたような恥辱の体勢に、全身が熱くなる。



手足に力を入れて脱出しようとしても、強力な粘着力で動かすことができない。アルカナの戦士のパワーでも歯が立たないところを見ると、合体技で使い切ったエネルギーがまだ回復していないようだ。

（でも服は元に戻ってるわね。最低限の防御力はまだ残ってる）

ボロボロになったコスチュームは戦う前の状態に修繕されていた。ライズジェムの防御機能が、所有者を守るために発動したのだ。

見た目はアイドルのようでも、致命的なダメージは衣装が肩代わりしてくれる仕組みだ。

「いい格好ね。アルカナサニー」

「ツツ！ シエルッ！」

奥の扉が開き、シエルが姿を現す。その手には大型のタブレットがある。

「私の実験室にようこそ。気分はどう？」

「ここから出て、もう一回勝負するわよ！ あんなの負けに入らないんだから！」

「フフ、元気そうだなによりだわ。これなら実験にも耐えられそうね」

「実験？ ふざけたこと言っただけで放しなさい！」

実験という単語に美少女戦士の背筋が冷たくなる。シエルの極悪非道さは、これまでの戦いで十分わかっているつもりだ。

すぐに殺すつもりはないようだが、このままではなにをされるかわからない。

「今は実験を楽しみなさい」

「楽しめるわけないでしょ。わたしに燃やされたいわけ!!」

「怯<sup>おび</sup>えなくてもいいのよ。きつと気に入るから♥」

シエルが手元のタブレットを操作すると、身体にくっついていない部分の粘着シートがゴムのごとく伸び、黄土色の膜となってアルカナサニーの身体を覆う。

スタイル抜群の総身が、ガニ股バンザイポーズのままラッピングされていく。バストの形がロケットのように強調され、太腿の肉感がエロスを煽る。ピッチリと張りついた膜によつてボディラインが露わになる。

「んぶ、ぐうううう……っ! や、やめて……むぐ、うううう! あう、ぐっ、ンンン……ッ!」

膜はみるみるうちに顔まで達し、口や鼻を覆う。酸素の供給が途絶えると、目を見開いて呻<sup>うめ</sup>き声を漏らすことしかできなくなる。

頭の奥ズキズキと痛み、水に溺れた時のように生命の危機を感じる。

「あぶ、ぶぶ、ううううう……っ! ンーッ! ンーッ!」

「落ち着きなさい。もう少ししたら息ができるようになるわ」



「ふぐ、くウウウウウウウッ！ ムウウウ……ウウッ！ むぐううううううううううっ！ う、うウ……」

シエルの言葉通り時間の経過に従って、少しずつだが膜越しにでも呼吸ができるようになった。

しかし、十分な酸素を取り込むことはできず、強烈な膜の圧迫感が胸を締め付け、少女は苦悶の声を漏らす。

肌に吸い付くビニールのような感触が不快でたまらず、どうにか脱出を試みる。だがやはり、鉄をも砕く普段のパワーが出せない。

それから三分が経過した。アルカナサニーからすれば数時間が経過したように感じる、ラッピング地獄がついに終わりを迎える。

「完成よ。お疲れ様」

「あうう、はあ……ハアハア……」

ようやく満足に呼吸できるようになったアルカナサニーは、息も絶え絶えになりながら、胸いっぱい空気を感じ込んだ。

全身に汗をびっしりと掻き、手足の震えが止まらない。

「し、死ぬかと思った……」





アアアアアアッ！」

チクリと痛みが走り薬液が注射された数秒後、美少女戦士の細面が苦痛に歪み、喉を絞るような声が上がった。

白雪を思わせる頬が赤く染まり、瞳が上目遣いになる。全身の感覚が鋭敏になり、ドクンドクンと心拍数が急激に上昇を開始する。

皮膚が痙攣<sup>けいれん</sup>するが真空パックのような状態では、すべての振動が身体の内側に向かう。その不愉快な感触と圧迫感は、少女に未知の性的嗜好を植え付けた。

（苦しい……身体が燃えるみたいに熱いつ！）

波紋のごとく広がる熱に反応するように、乳輪は真っ赤に紅潮し、股間がジツトリと湿り気を帯びていく。

そして、変化が起こり始めた。

「んっ……あうううう……っ、ハはあアアアアアアッ！アソコが熱くて……おかしい……っつ！うぐ、ンウウウウ……はあ、ああ……ぐううううううううう……っつ！」

股間の肉がググツと盛り上がる感触に、瞳を見開き苦悶の声を出す。身体から異物が生えてくるおぞましさに、全身の産毛が逆立つ。

膜の内側から滲<sup>にじ</sup>み出る薬液が器用にスパッツの股間部分だけを溶かし、肉突起を窮屈な布地から解放する。

「はうつ、あああああうつつ！ アソコが……燃える……ゾッ！ ぐううううウウウウウウウーッ！」

炎や熱を操るアルカナサニーは、経験したことのない灼熱に翻弄<sup>ほんろう</sup>される。股間の肉はさらに盛り上がり、クリトリスや尿道が伸びるような感覚に襲われる。

腰を浮かせようにも、できないことがもどかしい。

（わたしの身体どうなっちゃうの!? 助けて！ ママ助けて！）

アルカナの戦士に選ばれたとはいえ、まだ年頃の少女。想像もしなかったピンチを前に、涙をこぼし母親へ必死に助けを求める。

最悪の時間を終わり熱が引くと、見事な肉槍がコンドームのごとく張りつく膜を押し上げ、天を衝く威容を見せつけた。

「フッフ、実験成功。すつごくご立派よ♥」

「え、なにこれ。う、ウソでしょ……?」

アルカナサニーの股間にそそり立ったのは、長さ二十センチもある男性のペニスであった。包皮は剥<sup>む</sup>けていないが勃起<sup>ぼつき</sup>状態で、尿道口がヒクヒクと蠢<sup>うごめ</sup>いている。



太い肉幹にはグロテスクな血管が幾筋も浮かび、睾丸はピンポン玉のように丸々と大きく、強烈な雄の欲望が感じられる。

人体実験の異常な結末に、全身からブワツと汗が噴き出した。

「戻して！ 今すぐ元に戻さないよ！」

「もう、おチンポが生えたくらいで大声出さないでほしいわね」

「ち、ちん……って、ヘンなこと言わないでよ！ うう、キモすぎ……」

男性器など保健体育の教科書でしか見たことのないアルカナサニーは、リンゴのように赤面する。

男のスケベ心で大きくなる器官など、少女にとっては汚物同然。現実離れた気持ち悪さに、気を抜くと嘔吐おうとしてしまいそうだ。

（ううう、最悪。で、でもこんなことで挫くじけないわよ。エネルギーが回復したら超高温で塵も残さず燃やす！）

怒りを支えにして自分を奮い立たせる。ライズジェムは使用者の感情により力の大きさを変える。

アルカナサニーは闘志、アルカナムーンは慈愛をエネルギーにして炎や光などの能力を発動しているのだ。

つまり心が萎えてしまえば、逆転するチャンスは本当にゼロになってしまう。

「あんた絶対に許さないんだから！ わたしを怒らせたこと後悔するわよ」

「後悔、ねえ。果たしてするのはどちらかしら」

シエルは先端がこけし形の電動マッサージ器を手にとると、アルカナサニーの前でスイッチを入れた。

ヴヴヴ、と耳障りな振動音が聞こえてくる。

「……なにしてるのよ。まさかそれで拷問でもするわけ？」

「貴女にはおチンポの気持ち良さを味わってほしいの。ビュービューって射精してみつともないアへ顔を見せてちょうだい。私の計画にはそれが必要なのよね」

「い、意味わかんないんだけど！　しゃ……せい……なんてキモいこと言わないでよね！」

フタナリチンポのことに触れられ、アルカナサニーの顔がカアツと赤くなる。

雄が雌を孕<sup>はら</sup>ませるために行う種付け行為。射精を自分がすると思うと、平静ではいられない。

「なんとも言うってくれていいわよ。それじゃさっそく始めましょうか。かなり激しく振動するから頑張りなさい♥」

「ッ……」



よく見ると電マは改造されているのか市販の物よりも一回り大きく、こけし部分にはブツブツとイボまで浮き上がっている。

振動音も鼓膜に響くほどで、美少女戦士は緊張から生唾を飲み込んだ。

（計画っていうのも気になるし、とにかく我慢した方が良さそうね。どんな身体にされたって、アイツの思い通りになんかなってやらないわよ！）

侵略者を調子に乗らせるなど、戦士のプライドが許さない。性的な方向からの攻撃は初めてだが、母と再会するために、アルカナサニーは気を引き締める。

「まずは軽いきましようか」

「やってみなさい。無駄だつて教えてあげるわ！」

シエルは調節スイッチを『弱』に合わせると、電マをフタナリチンポに近づける。狙いはビンツとそそり立った雄幹の部分だ。

こけし部分が膜越しにぴとりと触れる。

「んう……ア……ああ、あぐっ!? ヒツ、えうっ!? ア、オ、んおおおおオオオオオオオオオオオ~~~~ツ!! こ、これで軽くって嘘でしょっ!? おう、くうううううう~~~~ツ!!」

凄まじいバイブレーションの衝撃に、意思の力など一瞬で削られる。初々しいフタナリ

チンポが、未知の刺激に狂わされる。

容赦のない極上の快美に、情けない声が止まらない。爆発的な淫悦がこみ上げ、視界がスパークする。

ブブ……ヴヴヴヴッ！ ヴヴヴヴヴッ！ ヴヴヴヴヴッ！

「はぎいいいいいいいつつ！ く……苦しい……あう、ひゃううううううううう……っつ！」

「これがおチンポの快楽よ。涙が出るくらい気持ちいいでしょ♥」

「ンウウウウウウウウッ！ こんな振動なんて……いつ、あうう……ンごおおおおおおおおおおお！ やめっ、あ、ああ……っ！ くうう……キツいい……」

眼球から火花が飛び散るほどの淫悦が、アルカナサニを襲う。息をするのも苦しい肉快美が勃起肉に集中する。

コンドームのように張りついた膜など、なんの障害にもならない。体験したことのない男性の快楽を一瞬で理解させられてしまう。

「うう、う……動かさないで！ あひっ！ ンンンンンンウッッ！ そこに当てないでええええええええええっつ！」



シエルは電マを根元から亀頭へとなぞるように動かした。快楽の波が徐々に大きくなり、情けない悲鳴が止まらない。

ゾワゾワと背筋に怖気が走る。

（男のアレがこんなに気持ちいいなんて……先っぽがムズムズしてヘンなのが昇ってきてきちゃうう……）

薬によって生やされたフタナリチンポは、通常男性が感じる快楽を一〇〇〇倍にして受け取ってしまう。

手で自慰をするだけでも三十秒と持たず射精してしまうだろう。雄幹は振動を過敏に感じ取り、欲情を昂<sup>たかぶ</sup>らせた。

まだ射精していないのは、射精を我慢するというアルカナサニーの想いに、ライズジェムが反応しているおかげだ。

「フフ、先っぽも撫でてあげるわね」

「ぐ、ひぐううううううううつつ！　そこ……ダメえ……ハウ、んあウウウウウウウウウウーッ！」

亀頭を愛撫されると鈴口がパクパクと開閉し、精管をザーメンが昇ってくる。

キンタマもせつなく疼<sup>うず</sup>き、腰が浮きそうになる。ラッピング拘束がなければ、たまらず

腰を振っていたかもしれない。

「ほお、おお。んあああああああつっ！ ひっ、あひうつ！ へオ、ンオオオオオオオオオオオーッッ！」

（このバイブすごすぎ……根元から先っぽまで全部感じちゃうっ！ くう、こんなのでドキドキしたくないのに）

休むことのない振動が、圧倒的な快美刺激を肉竿に流し込む。肌が波打ち、すぐ下にある恥丘に熱が溜まっていく。

ガニ股腋見せの恥辱ポーズのまま身をよじることでもできず、アルカナサニーははしたなく嬌声きようせいを漏らし続けた。

「おっ、ああっ、ウウウ……くうううう……っ！ くう、いつまでやってんのよ！ ひやう、はああああああああああっ！」

「イキたいでしょ？ 射精したいでしょ？ そのエッチな顔を見れば丸わかりよ。どんなに強い戦士でもおチンポが生えたらシコ猿になっちゃうのよね♥」

「そんなわけないでしょ……ハア、アウウウウウウウウウッッ!! 弄もてあそばれた仲間に代わって、あんた燃やしてあげるわ！ くう、ンンンン、ハア……あくウウウウウウウウッッ！」



性に疎いアルカナサニーでも、射精に関する知識はある。男性の性的興奮が最高潮に達した時に吐き出される白濁液。

そんなおぞましいものを身体から出すと思うと、嫌悪感で肌が粟立つ。快楽を感じている今の自分も許せないのに、射精などできるわけがない。

「ふうん、じゃあもつと激しくイジメてあげる♥」

「あひやぐつ!? つ、強いいいいいいいいいつつ!? ンッ、エうううううう……っ! はあ、ふアア……おつぐあアアアアアアアアアアッ!」

シエルによつて振動が『中』の電マを当てられると、無数の舌でフェラチオをされているような悦楽が精管に響き、頭の中が真っ白になってしまう。

生えたばかりの男性器を<sup>なぶ</sup>られる快感は、言葉にならないほど強烈だ。カウパー腺液がとめどなく滲み出し、膜の内側をいやらしく濡らす。

「うう、こんな……あお、ンおおおおおお……ッッ! こんなズルいつて! あぐ……くううう……はあハアア! 感じる……感じちゃうからああああああ♥ はう、ぐううううううううつつ!♥」

キノコ肉を揺さぶられる辱悦に、美少女戦士は苦悶の吐息をこぼす。上品なバストの先端もピン勃起し、乳首は熟れたイチゴのように紅潮した。

頭の中がぐちゃぐちゃにかき混ぜられ、射精アクメへの期待感が狂おしいほどに昇ってくる。

（イキたい……射精したい……っ、しつかりしなさいアルカナサニー！ 流されてんじゃないわよ！）

隙間なく押し寄せる振動辱淫悦に、フタナリ肉竿が翻弄される。亀頭の先端から快美が伝播し、睪丸へ妖しい衝動が溜まっていく。

むっちりと肉のついた太腿が震え、楕円形に押しつぶされたヒップが熱を帯びる。縦スジもうつすらと開き、ピンク色の細穴を開帳した。

「おチンポの奴隷にしてあげるわ。はい、もうお漏らししたくてたまらない♥」

「わたしは漏らしたりなんかしない！ はう、……う、くウウウ、うううううううううつつ!? いやっ……あ、アアアアアアアアアアッ！ また激しくしないでエエエエエエエエエエエツッ！ おがじくなる♥ 狂っちゃうからあああああああああああああああつつ♥♥」

シエルはダメ押しとばかりに、電マのスイッチを『強』に入れると、グリグリと亀頭に擦りつけた。包茎の皮越しでも伝わる快美振動が、鈴口から睪丸まで走り抜ける。

目の前で火花が飛び散り、一秒も持たず抵抗する意思が打ち碎かれる。アルカナサニー

は喉が裂けるほど声を上げ、絶頂への階段を上っていく。

「くる……なにかきちゃう！ あああああ……っつ！ ダメ……きちやダメなんだから……あぐ、ホおアアアああああああッッ!!」

鋭い快楽が連続してフタナリ勃起に突き刺さる。圧迫感と共に裏筋がせつなく疼き、淫らな熱が溜まっていく。

思考を規則的な淫辱に支配され、ついに少女は精通を迎え――。

……ッ！ ……ッ！ ……ッ！ ……ッ！ ……ッ！

「あら、意外。まだ我慢できるのね」

「ハアハア……い、言っただでしょ。あんたなんか屈しないって」

アルカナサニーは息も絶え絶えになりつつも、射精欲求に耐えていた。地球の平和を守るアルカナの戦士としてのプライドが、ギリギリのところで快楽を退けたのだ。しりぞ

フタナリチンポは先走りまみれのまま、悲し気にビクついている。

「驚いたわ。今の責めで射精しなかったのは貴女が初めてよ。さすがアルカナデュオといったところかしら」

「へーそうなの。別にあんたに褒められても嬉しくないけど」

アルカナサニーは荒々しく息を吐きながらも、不敵に笑う。頭の中は快楽にまみれてい



るが、心の気高さは失っていない。

（やった！　ちゃんと我慢したわよ！　このわたしが無様に射精なんてするわけないんだから）

ドクンドクンツと血液をポンプし、燃えるように熱く疼くフタナリペニスを、アルカナサニーは精神力だけで制御する。

強い想いがライズジェムを輝かせ、常人なら三十秒と持たず射精してしまう電マ責めに耐え続ける。

「無様に漏らすと思ったんでしょうけど残念だったわね。このまま計画もブツ潰してあげるわ」

「プランをCからDに変更しようかしら。少し本気でいくわ」

シエルの瞳に妖しい光が灯る。見る人間の庇護欲をかき立てる可憐な少女だが、彼女もアビスナンバーズの一人。

内に秘めたサディズムは、常軌を逸している。

「いいわよ。何度やったって我慢してみせる！」

「そう。でもこれはどうかしら」

「え。あんたなにしてるわけ？」

さらに凶悪な拷問道具による調教を想像していたアルカナサニーは、予想外の状況に目を丸くする。

シエルは靴を脱いで裸足になると、ガニ股に開かされた脚の間に立ち、足の指でフタナリペニスに触れたのだ。

子供らしいペタペタした足裏の感触が膜越しに伝わってくる。

「んっ、んううう……」

（ちよつとむず痒いけど……さっきの電マ責めに比べたら全然マシね）

フタナリへの責めが弱くなり、アルカナサニーは困惑する。まったく感じないわけではないが、先程のバイブレーションとは雲泥の差だ。

「ちつとも効かないわよ。お得意の機械に頼らないとなにもできないみたいね！」

「アルカナサニー、私の特技を知っているかしら？　本当は怪人を造るよりもこっちの方が得意なのよ」

「……なによりいきなり。そんなの知らないわよ」

「それはね、おチンポをマゾチンポに堕とすこと♥」

「あんなに言つて——、んっ、んうううう……っっ！」

強気な態度を崩さないアルカナサニーだったが、シエルの足に擦られ続けていると、声

に甘いものが混じり始めた。

膜の上から撫でられているだけの愛撫だが、肉幹はどんどん硬さを増していく。胸の奥が妖しく疼き、せつないものが股間に溜まっていく。

しゅり♥ しゅり♥ しゅりしゅりすり♥ こしゅ、コシユコシユコシユ♥

「くっ、んううう……っ、はうううう……っっ！」

「どうしたの？ 感じないんじゃないのかしら？」

「う、うるさいわね。あんたがヘンな動きしてるから……あう、んうううう……はああ……うっ！ くウウウウウ……ッッ！」

スリスリとペニスを撫でる足裏の感触が、緩やかだが確実に快楽を伝えてくる。無機質な機械とは違う生の肉淫悦。

性器を足で踏まれるという倒錯的とうさくてきなシチュエーションが、じわじわと欲情の炎を大きくする。鈴口が再び潤み、カウパー腺液が滲んでくる。

「おチンポが濡れてきたわね♥ グチョグチョっついていやらしい音が聞こえるわよ♥」

「だ、黙って……くうっ！ あっ。ぐううううううっっ！ んう……ウウ……むぐうううううう……っっ！」

「口と違って身体は正直みたいね♥」



「黙れって言うてるでしょ！　くううう……このつ、おウウツ！　足なんかで感じるわけがないのに……っつ！　アウツ、ぐぐ、んくウウウウ……ッッ！」

亀頭から始まり玉袋の根元まで、可愛らしい足指が快楽を与えてくる。裏筋を親指と人差し指の間に擦られると、アルカナサニーはぎゅつとまぶたを閉じた。

チリチリと火で精管を炙られているようで、薄くリップの塗られた唇から、雌の吐息がこぼれ出る。

白い頬が赤みを帯び、膜越しに柔肌が震える。

「やあ、ああア……クう……むうううう……っつ！」

「ふうん、ここが弱いね」

「ひやつ、あうううウウつ！　そ、そこ踏まないで！　ぐううう……はあうつ……おつ、んううううう……ッッ!!♥」

亀頭を重点的に責められ、アルカナサニーはたまらず悲鳴を上げる。包茎の皮をぐりめぐりゆと弄いじられると、腰が浮き上がりそうなほど気持ちいい。

カウパー腺液がローションの代わりになり、皮オナニーをしているような淫楽がフタナリチンポに突き刺さる。

鋼の精神力がガリガリと鑢やすりで削られていく。



「包茎おチンポのままだと恥ずかしいわよね。剥いてあ・げ・る♥」

「ちょ、ちよつと待って！ 剥くってなんの話——ほっ、おぉっ!? ハヒ、ンンウウ  
ウウウウウウーッッ!!♥」

シエルは器用に足指で皮をつまむと、膜と合わせてズリユンツと下ろした。包茎の皮が  
捲れ、初々しいピンク色の亀頭が露出する。

ライチのように滑らかな表皮に足裏が触れると、女性とは思えないマゾ声を出してしま  
う。初めて敏感な部分を責められ、産毛が逆立つ。

「ひうつ、ぐくウウウウウーッッ！ ぐ、グリグリしないで！ ひっ、ンヒ  
イイイイイイイーッッ!♥」

「だあめ♥ そんな声でお願いされたら、もつと意地悪したくなっちゃう♥」

「ひやぐ、くうううう……えお、あうううううううっ！ もうやめて……アレがお  
かしくなっちゃう……なっちゃうからあああああああっ！」

足裏全体で踏みつけるように、シエルは亀頭を集中して責める。ほどよい圧力が繰り返  
し快楽を与え、フタナリ肉竿は悦びでさらに屹立きつりつした。

もどかしい欲求が鈴口を開閉させ、先走りは泉のように溢れて止まらない。射精という  
未知の感覚が再びこみ上げ、美少女戦士は恐怖に唇を噛んだ。



「私のフタナリ改造はおチンポが生えるだけじゃなくて、性的興奮も雄と同じになるの。」

地球の男性って下着に反応するんでしょ？♥

「わたしが男と同じなんて……あつ、ひゃうううううん！ くつ、また足で……おつ、あぐうううウッ！♥」

思わぬ事実に動揺するアルカナサニーだが、そのことに思考を巡らせる暇もなく、シエルは次の責めに移る。

両足を伸ばすと左右からフタナリ勃起を挟み、擦り出したのだ。先程の踏みつけよりも手淫に近い淫悦が、火照った雄幹を直撃する。

コシュ♥ こしゅこしゅ♥ シュリ♥ しゅりしゅりしゅり♥

「あんうううううつ！ 好き勝手してくれるわね……ンン……はあ、あうううううううつ！」

「おチンポがすつごく熱くなってるわよ♥ もう限界に見えるけど♥」

「そんなわけない……でしょ……はうつ、ンクウウウウッ！♥ あぐ、うつ、ゾゾゾゾッ！♥」

口では否定しようとも、雄の欲情は止まらない。視覚と触覚が限界以上に昂り、フタナリ肉竿も乳首も痼<sup>しこ</sup>り勃<sup>た</sup>つ。

パンティを押し付けられながら勃起肉を扱かれる変態シチュエーションに、マゾヒズム

が揺り起こされ、理性の砦が少しずつ崩されていく。

「あう、んあううう……つつ！ いや……ああああア……」

（ライズジェムの輝きが弱くなってる。これってかなりマズいかも）

感情をエネルギーに変え、鉄をも砕く力を生み出すライズジェムだが、そのシステムには欠点もある。

憎悪や快楽など負の感情が大きくなれば、そのエネルギーに理性が吞まれ、悪の道に堕ちてしまうことだ。

（気持ち良さに流されちゃダメ。射精だけは我慢しないと本当におかしくなっちゃう。でも擦られるのすごいい♡ 先っぽがジンジンするよお♡）

過去には快楽に抗えず、アビスゲートに服従してしまったアルカナの戦士もいる。アルカナサニーは母に聞かされた話を思い出し、懸命に射精衝動へ抗う。

だがライズジェムの輝きはどんどん弱り、黒い影が宝石の内部で濃さを増す。正義の心が肉悦に塗りつぶされていく。

「嘘を吐いてもダメよ。だって私のパンツで興奮してるんでしょ？♡ 鼻息は荒くなっておチンポはガチガチ♡ 亀頭も我慢汁でビショビショ♡ もうイキたくってたまらないのよね♡」



「あんたの子供パンツで喜んだりしないわよ！ んう、むう、むんんうううううう  
ーっっっ！！♡」

ぎゅっとお尻を押し付けられると、反論する言葉さえ封じられてしまう。白桃のように  
柔らかく、少し芯のある感触が、海綿体に血液をポンプする。

イチゴ柄のパンティがロリイな興奮を煽り、いけないことをしているという感情が、絶  
頂の炎を燃え上がらせる。

「あっ、ああっ、ああああーっっ！ はぐ、くううう……♡ べ、別に興奮なんてし  
てないんだから！ ふう♡ んううう♡ はっふうううううううっっ！♡」

「イけ♡ イけ♡ イッちゃいなさい♡ 子供パンツで喜ぶド変態♡ 足コキで感じちゃ  
うフタナリマゾちゃん♡」

「違う……わたしは変態なんかじゃない！ あぎ……ほっ、おお、ンううううううっっ！  
♡ アレが……お、おチンポがおかしくなる……ダメ……はあ、あうううううううっ  
っ！♡」

精液は濁流のごとく荒れ狂い、フタナリ肉竿の中で飛沫を散らす。左右から交互に撫で  
る足指の感触は、涙が出るほど心地よい。

またぐら  
股座が浮遊感に包まれ、最後の時が美少女戦士に迫る。

（もうムリ……こんなの我慢できるわけない！ 出ちゃう♡ 出ちゃううううううううううううつつ！♡）

電マから続く快美の連続攻撃で、ついにアルカナサニーの理性が崩壊する。腰がガクガクと震え、すべての感覚が股間に集中する。

鈴口はパクパクと開閉し、海綿体が最大まで膨張する。カリ首がキノコ笠のように張り詰め、カウパー腺液が溢れ出る。

すべてが限界に達した時、フタナリ美少女戦士は精通を迎えた。

ドビュ♡ ビュググ♡ どびゅびゅびゅウウウウウウ♡ どぶ、どぶどぶ♡ ビュツク♡ ぶびゅばああアアアアアアアア♡ あッ♡

「でる……でりゅううううううつつ♡ ああ、あうううううつつ♡ 止まらない……止まらないよ♡ おチンポイク♡ イクイク♡ イッちやうううううううううう♡」

アルカナサニーは瞳を上ずらせイキ声を張り上げる。快感神経をプレス器で押しつぶされるような悦楽、理性の糸がまとめて引き千切られる。

滑らかな肌に汗の玉がいくつも浮かび、手足の痙攣に合わせて膜がビクつく。使用済みコンドームのように膜が膨れ、精液溜まりがどたぶんと揺れた。

「アハ、アハハハハ！ 射精おめでとうアルカナサニー！ ホントすっごい量ね♥ おしっこみたい♥」

「ハアハア……く、屈辱……」

用は済んだとばかりにシエルは立ち上がり、無様に肩で息をするアルカナサニーを見下ろす。

悔しさと唇を噛むが、可愛らしいフリルのコスチュームも恥汗でベトベトで、アルカナの戦士としての威厳はまったくない。

（この借りは必ず返すわよシエル。って——な、なによこれ!?!）

怒りに打ち震えるアルカナサニーをさらなる異変が襲う。ライズジェムが山吹色ではなく、黒く輝き出したのだ。

快樂のエネルギーで思考が塗り替えられていく。

「フフフ、始まったわね。アルカナサニー、貴女はどんな姿に堕ちるのかしら♥」

「うそ、嘘でしょ!? ライズジェム待って！ わたしは堕ちたくなかない！ こ、こんなのにやああああああああああっ!!」

シエルの嘲笑が遠い世界のように聞こえる。黒い輝きに吞まれ、アルカナサニーの意識は闇へと堕ちていった。



## 第二話 屈辱の赤ちゃん体験

アビスゲートの次元侵略が本格化する二十五年前。アルカナムーンはライズジエムの研究を行う【アライズ】という組織に所属していた。

組織の目的は人間社会に紛れ<sup>まぎ</sup>スパイ行為を行う怪人の撃破、いずれ来る本格的な侵略に對抗することだ。

「アルテミス・アロー！」

「ぐがああああああああああつっ！」

「ハアハア……これで一体目」

突如、アライズの本部を襲った怪人部隊。アルカナムーンは試作型のライズジエムで光輝転身し、懸命に抵抗を続けていた。

まだ実戦経験の浅いアルカナムーンでは、一体の怪人を倒すのに相当なエネルギーを消費してしまう。

研究員たちも銃火器で反撃しているが、長くは持たないだろう。

「本部はもうダメだ。研究資料をまとめたデータを持って君は逃げろ」

「でもそれではあなたたちが！」

「アルカナの戦士に選ばれた君がいれば希望は消えない。人類の命運、託したよ」

「そんなこと言わないでください！ 私はまだやれます！ こんな怪人たちになんて負けたりしません！」

「もう変身状態を維持するだけで精一杯のはずだ。僕たちの戦いを無駄にしたくないなら行ってくれ。さあ早く！」

「つう……必ず人類を救ってみせます」

自分の担当だった研究員に背を押され、アルカナムーンは炎上する本部を後にした。それから三年後、新生アライズに所属したアルカナムーンは日本防衛の要となる。

未来の夫と出会い、朝光を授かる頃には、その名を知らない怪人はいないほど、彼女は最強の戦士となっていた。



「ここは……ウウ、つつ！」

重いまぶたを開き、アルカナムーンの意識が覚醒する。仰向け状態で目覚めたせい、瞳には白く無機的な天井が飛び込んできた。

自分の置かれている状況を思い出し、しばし表情が強張<sup>こわば</sup>った後、五体が満足に揃っていることに安堵する。

敵地で意識を失うなど最悪の失態。本来ならそのまま永眠することになっても文句は言えない。

（まずは状況の把握ね。手錠ははめられてないけどまだ身体は動かせない。拘束するまでもないってことかしら）

毒ガスの影響が残っているのか、まぶたや指先程度は動かすことができて、起き上がれることはできなかった。

アルカナムーンは瞳を動かし、周囲の様子を観察する。天井と同じく壁も白く汚れ一つない。

背中には柔らかなマットレスの感触があり、寝ていた場所がベッドだとわかった。床にはパズル状のカラフルなマットが敷かれ、幼児用の小さなすべり台や、積み木が部屋の隅に置かれている。

（変身は解除されていないけど戦士の力は出せないみたい。私の身体を守ることとで精一杯のようね。でもなにか身体がスースーするようない……）

ライズジェムは所有者を保護するモードに入っている。エネルギーが回復するまでは解



毒して、戦うことはできないようだ。

ただ肌を露出している部分が多いようで、アルカナムーンは怪訝な顔をする。破れたコスチュームがまだ修復されていないのだろうか？

（不気味なところね。なにを目的にした部屋なのかしら）

侵略者の拠点とは思えない、まるで児童施設のような光景に眉をひそめる。

シエルに捕縛された以上、陰惨な拷問を受けることも覚悟していたのだが、この部屋はそれとは正反対だ。

（サニーはどこなのかしら。心配だわ）

自分と同じように意識を失った娘のことが気にかかる。

一人前の戦士だと認めてはいるが、それでもひどい仕打ちを受けている姿を想像すると、心臓がぎゅっと締め付けられるようだ。

そう考えを巡らせていると部屋の扉が開き、シエルが入室した。

「おはよう。お目覚めのようね」

「サニーをどうしたの。あの子に手を出したらタダじゃおかないわよ」

「生きているわよ。無事とはいわないけど爪を剥がすみたいなグロい拷問は趣味じゃないの。貴女が大人しくしていればまだ会えるから安心なさい」

（体のいい人質ってことね。でも生きていてくれて良かったわ）

去り際のシエルの言葉から殺すつもりがないことはわかっていたが、言質<sup>げんち</sup>が取れ心が少し軽くなる。

目的が達成されない限りは自分も処分されないだろう。アルカナムーンは情報を引き出そうと質問を続ける。

「ここは一体なんの部屋なのかしら？ 私をからかっているようにしか思えないのだけど」

「なにつて調教室よ。まさかお遊戯会でもするつもりだった？ まだ自分がどんな姿をしているかわかってないようね」

「——ッ！ な、なんなのよこれ!!」

天井の中央部が円形に回転し、大きな鏡が現れる。そこに映った自分の姿を見て、アルカナムーンは目を見開いた。

美少女戦士のコスチュームは剥奪され、頭にはフリルの付いたフード、胸の上にはよだれ掛けが乗せられ、手にはフワフワしたミトンの手袋を着けられている。おまけに股間にはスパッツの代わりに、大人用のオムツまで穿かされている始末である。絵柄はすべて可愛らしい花柄模様だ。

それ以外の衣服は認められておらず、滑らかな素肌が晒され、Kカップの爆巨乳がよだれ掛けの間からはみ出し、乳輪がチラチラと見えていた。

「ッ……わたしを辱めているつもり？　だとしたらセンスがいいとはいえないわね」

「別に馬鹿にしているわけじゃないわよ。その衣装はザーメンで部屋を汚さないようにするため。みんなすぐビュービューしちゃうから♥」

「言葉の意味がわからないわ」

「あらまだ気づいてなかったの。ほらこれよ」

「んっ、あうううつつ！　そ、そんな！」

シエルにオムツを撫でられ、アルカナムーンはようやく自覚した。自身の股間にフタナリペニスと金玉が生えていることを。

一度意識してしまうと肉竿がドクドクと脈打つ感覚や、包茎の皮から頭をハミ出した亀頭のことも感じられる。

男性器を生やされるという非現実的な状況に頭がクラクラする。

「人体改造とはやってくれたわね。まともな倫理観なんて期待してなかったけど、0点の品性だわ」

「怖い顔ね。おチンポを生やしてあげただけなのに」



ケイオスなら失神してしまうような殺気も、シエルは飄々<sup>ひょうひょう</sup>と受け流す。水を殴っているような手応えに、アルカナムーンは齒噛みした。

（殺さずにペニスを生やすなんてなにか裏があるわね。もし快楽によるライズジエムの暗黒化を狙っているとしたら厄介だわ。どうにかして脱出する隙を見つけ出せばいいのだけど）

暗黒化とは負の感情エネルギーに精神が吞まれてしまうことだ。そうなったアルカナの戦士はただ快楽だけを求め、殺人や強姦にも躊躇<sup>ためら</sup>いがなくなってしまう。過去に暗黒化した戦士の一人は、仲間の手によってこの世を去った。

シエルの思惑を予想し、アルカナムーンは脱出の機会を探る。どこか別室に拘束されているだろうアルカナサニーを助けるためにも、絶望などしてられない。

「なにか色々考えているみたいだけど、私はおチンポでイッてる姿が見たいだけよ。雌の身体で雄の快楽に悶えている姿って爆笑だもの♥」

「他の戦士にそうやってきたのね。期待を裏切って悪いけど、私は射精なんてしないわ。ペニスを生やしたところで心までは支配できないわよ」

「ふうん、じゃあ試してみましようか。本当に耐えられるのか」

そう言うとシエルは小瓶を取り出し、内部を満たしている緑色の液体をアルカナムーン

の腹部に垂らした。

液体はアメーバのように広がると、明確な意思を持って胸の方向へ進んでいく。

「スライム!? つ……!」

「その子は私のペットなの。女の子にはやさしいから安心していいわよ」

「ふざけないで……うつ、あああ、くうううう……っっ!」

スライムが乳房に触れると、アルカナムーンはか細い声を漏らした。ひんやりと冷たいボディが、ニルニルと柔肌を撫でる。

Kカップのメロンバストが、風船を掴つかんだようにたわんだ。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅふにゅん♡ むに♡ むにむにゅん♡

「あう、ああううう……! くう、はううう……!」

(肌に吸い付いてくる……なんて気持ち悪い生物なの)

ゼリーが薄く広がっていくような感触。肉体の九割が水分のスライムは、ジツトリと湿り気を帯び、ハツカのような匂いがした。

まるで大量のクラゲに纏わりつかれているようで、アルカナムーンは不快そうに声を漏らす。力が戻っていないことがもどかしい。

「会うたびに思っていたけど、貴女のおっぱいってバカみたいに大きいわね。前世は乳牛にゅうぎゅう

だったのかしら？」

「知らないわよ……ぐ、っう、んくっ、はあううううう……っつ！ あくっ、ハアハア……」

「もう一つ教えてあげるけど、その子の身体には媚薬成分が含まれているの。触られてる時間が長くなるほど感じやすくなるわ。このままだと常時発情してる頭。ピンクの淫乱オバサンになっちゃうかもしれないわね♥」

「この下衆<sup>げす</sup>……はう、ぐっ、アアアアアアアアア……っつ！」

「抵抗は無駄よ。寝ている間に筋力を低下させる薬を使わせてもらったわ。ライズジェムが回復するまでは私の奴隷になるしかないの♥」

「くううう……はうっ、くああああ……っつ！」

薬の影響で身体をよじめることもできず、屈辱の愛撫を受け入れるしかない美熟女戦士。夫以外に乳房を弄られるのは、初めての経験だ。

媚薬の効果で頬が朱色に染まり、湯気が出そうなほど熱くなる。陥没気味の乳首がムクリと痼り勃つ。

「あうっ、ううう、っウウウ……くう、んうううう……っつ！ 私の身体はオモチャじゃないのよ。その気持ち悪い動きをやめなさい！ ンア、あふああ……くあああああああ



あ……」

アルカナムーンの反応に気を良くしたのか、スライムはさらにボディを広げる。水をこぼしたように、胸が緑色の軟体に覆われていく。

そしてボディ全体を使って、メロン爆巨乳を揉みしだいた。

「えあ、アアあ……ふぐ、クウウウウウ……ッッ！ いや……ああ……はう、つウウウウウウウウ……ッッ!!」

「とっても気持ちよさそうな顔ね。まさに雌豚って感じよ♥」

「はあうううっ！ ん……ああああああっ！ こ、これは媚薬のせいよ……ヴッ、つくあああああ……っっ！」

スライムが全身を使い、グニユグニユとおっぱいを愛撫する。柔らかな肉毬が形を歪め、淫猥<sup>いんわい</sup>にたわんだ。

女性を辱めるしか能のない下等生物に感じさせられていると思うと、怒りがこみ上げてくる。美熟女戦士はミトンに包まれた拳を握った。

「フフ、おっぱいが大きすぎてスライムの体積が足りてないみたい。さすがにこれは予想外ね♥」

「どこまで私を馬鹿にするつもりなの。くっ……あうううううっ！ んうっ、あううう

うううつつ！ それより飼い主に似て頭の悪いペットを躑けておきなさい」

「聞き分けのない赤ちゃんにはお仕置が必要ね。もつと激しくしていいわよ」

「んくつ、ふううううう……ア、はあああああ……つつ！ ング、苦しい……はあう、へっうううううう……つつ！」

スライムは好き放題に動き回り、爆巨乳を弄ぶ。指からこぼれるほどの柔肉が餅のように形を変え、ブルンッブルンッとダイナミックに弾む。

自慰とは違う積極的な責めに、アルカナムーン美貌が少しずつ朱色に染まっていく。夫を病気で亡くしてから男日照りだった身体に、遠慮のない愛撫は効果的すぎた。

「はあ……ああ……ンくううウウウウッ！ 抵抗できない相手を齧るなんて……ヒウ、はああああ……うううつつ！ どこまで最低なの」

「悲しいわね。あのアルカナムーンが無抵抗で月並みな罵倒しかできないなんて」

「やつ、ああああああ！ 乱暴にしないで……つつ！ んくつ、ぐうううううううううう……！ 胸がおかしくなる……つつ！」

スライムの動きが激しさを増すと、アルカナムーンの声が跳ね上がった。唇を噛み必死にこらえようとしても、情けなく色声を漏らしてしまう。

Kカップバストは火照り、せつない欲情が溜まっていく。下等生物に触れられているは

ずなのに、発情する自分を抑えられない。

「うわ、乳首ビンビンに勃起してる♥　どれだけ胸で感じているのよこの淫乱♥」

「だ、黙りなさい……んう、あくううう……ひやううつ！　ううう、んあああああー  
ーつつ！　ぐつ、ベタベタしないでちょうだい……つつ！　あう、乳首擦るのやめてえ……  
……つつ！」

軟体ボディが円を描くように、乳首の部分をスリスリと擦る。こそばゆい快感が乳輪に  
広がり、細面がぽつと赤くなる。

イチゴのように赤く熟した乳頭から伝わってくる快感。怒りを覚えているはずなのに、  
雌の悦びを抑えられない。

「んんっ、あつ、ううう……はあつ！　あひいいい……んっ！　おつ、あうっ！  
ンクウウウー……ッッ！」

「あら、おマンコまで濡れてるのね。そこまで感じさせるつもりはなかったんだけど♥」

「んんっ……でたらめ言わないで。見えるわけないでしょ」

「透視能力なんて幹部クラスなら標準装備よ。もちろんおチンポが大きくなってるのも丸  
見えよ♥」

「媚薬なんて使われたら誰だって濡れるわよ！　ンンン、ああ……ふうう……つつ！　あ



ひ、ううううう……っつ！」

丹念なおっぱい愛撫の成果か、オムツの股布にはジットリとシミが浮かんでいた。フタナリ肉竿の先走りと合わさり、濃密な雄と雌の匂いが密閉された空間に籠もる。

恥部を観察されていると知り、アルカナムーンの心拍数が一気に上がる。あまりの恥ずかしさに頭がおかしくなりそうだ。

十分に媚薬の効果が出ていることを確認すると、シエルはスライムに次の指示を出した。  
「まだイッチやダメよ。本番はここからなんだから。おチンポの快楽をたっぷり教えてあげるわ♥」

「ううう……ああッ……入ってくるっ！ ふうつ、はううううああ……っつ！ あああああああ……っ！ いやっ、感じさせないで！」

オムツの隙間からスライムが侵入を開始する。媚薬の混じったボディが直接オマンコやフタナリ肉竿に触れ、アルカナムーンは声を張り上げた。

「やめてっ、触らないで！ そんなところ弄らないで！ うぐ、っうううううううううううっつ！ はう、ううううううううううっつ！」

スライムは勃起肉竿に絡みつuki、感度を最大まで上昇させた状態で、幹を何度も擦り上げた。

生えたばかりの雄肉を集中的に責められ、寝室で行っている自慰とは比べものにならない快感が美熟女戦士を襲った。

にゆる♥ にゆる♥ ムニユ♥ ぐにゆぐにゆむにゆる♥

「あひ……っ、ンンンンンンンンンンう……ッッ!!」

(ペニスが熱い……これが男の人の快感なの)

淫悦が一秒ごとに上昇し、アルカナムーンは肉勃起に惹かれる自分に困惑する。快楽に耐える訓練も積んできたはずなのに、鈴口がせつなくて仕方がない。

スライム相手に感じさせられるなんて、今まで想像もしなかった。

「おチンポって素敵でしょ？ もう射精したくなかったかしら？♥」

「はう……ああ……んくウウツ！ そんな醜態を晒すつもりはないわ。……うう……あふううう……はあ……ううアアッ！ ひやう、おおう、ふっぐくウウウウウウウウウウウ……ッ!!」

冷たい粘液が竿と玉に絡みつき、キュウキュウと引き絞る。手淫とは違う変幻自在の悦楽が、歴戦の戦士をも狂わせる。

フタナリ陰茎を流れる血流が速くなり、カリ首が包茎の皮を突っ張らせながら笠を開く。

ニユチュ♥ ニユチュ♥ ブリュ♥ ずりゆりゆちゅん♥





「おうっ、おおあつ！　ハウッ……んふううう……ひぐうううううう……！　ゾリゾリって中に入ってるううううううう……！　おお、あああああああ……！　痛いのに感じるううううううう……！　♡」

媚薬で感じやすくなった肉体は、痛みすらも快楽に変換してしまう。ペニスの内側を責められているのに、甘い快楽が止まらず、つま先がぴんつと上を向く。

欲望に任せ射精したいという、ふしだらな想像を止められない。

（快楽に流されてはダメ。人類の誇りを見せるのよアルカナムーン）

地球を守る戦士の矜持<sup>きやうじ</sup>を胸に、心を奮い立たせる。自分と同じく拷問に耐えているであろうアルカナサニーのためにも、易々<sup>やすやす</sup>と折れるわけにはいかない。

「さすがベテラン戦士、我慢強いだね。ならもつと強く扱いてあ・げ・る♡」

「——ッッ!!　おっ、ほごおおおおお——っ!!」

尿道管に侵入していたスライムが、激しく抽送<sup>ちゆうそう</sup>を開始した。細い管の中をジュコジュコと音を立てて、擦り上げる。

おしっこが逆流するようなおぞましい感触に、アルカナムーンは濁った悲鳴を吐き出す。自分のペニスの中をスライムが蠢いている現実。

歴戦の実力者である彼女でなければ、発狂し舌を噛み切っていただろう。



「んくううう……う……う……くううつつ！ も、もう動かないでエエエエエエエエエエエツッ！ うぎ、ぎイイイイイイイイイイイイイツッ！」

「ああ、いい音色♡ たまらないわ♡」

「はうつ、ンツ……あああああうつつ！　へご、ほつ、もとおおおーつつ！　お、ゾ  
オオオオオオオオオーッツツ!!」

デリケートな尿道管をスライムは紙縋りこよのように擦る。マスターベーションとは次元の違う鮮烈な刺激が、肉竿の奥へと突き刺さる。

オムツの中は愛液と先走りドロドロだ。

「はうっ、おっ、おおっ、ンンぐううううううっ！ やめて……もうこれ以上は……」

…へお、おひ  
イイイイイイイイ  
イイイイイイ  
ツツ！  
♡

（もう我慢できない。漏らす……漏らしてしまうっ！）

絶え間なく快感を与え続けられ、アルカナムーンの理性が限界を迎える。視界が明滅し、全身が蕩けるような浮遊感に包まれる。

「すつごくエロい顔ね♡  
じゃあこれで終わりにしてあげるわ♡」

「ほひっ!! い、今抜かれたら……へう、もつおおおおおおおとお  
おっっ!!」





「フフ、反抗する気力は残っているみたいね。期待通りで嬉しいわ。そうじゃないと面白くないもの」

「アルカナデュオを舐めないでちょうだい。たかが精液を出した程度で泣きわめくとも思っていたのかしら」

「いい表情ね。次のプレイはもっと楽しめそう♥」

「……？ な、なにをしているの!？」

疑問符を浮かべるアルカナムーンを無視して、シエルはオムツに手をかける。マジックテープを外すと、股間が外気に晒されやや萎えたフタナリ肉竿が姿を現した。

濃厚な雌と雄の淫臭が解放され、ムワツと鼻孔を刺激する。

「あらあら、すっごい匂いね。エッチすぎて私まで濡れちゃいそう♥」

「わざとらしく鼻をつままないで。あなたがこんなもの生やしたからでしょ！ ……それにジロジロ見ないでくれるかしら」

シエルに股の間から勃起肉や膣穴、アヌスを注視され、アルカナムーンは嫌悪感を滲ませながら吐き捨てた。

己の秘部を無防備に晒すのは、顔から火が出るほど恥ずかしい。シエルはおしゃぶりを取り出して、なにやら思案している。





ううつつ♥ い、イキたいい……」

「射精なんかしないってカッコ良く啖呵を切っていたわよね。あの時の気概はどうしたのかしら♥」

「あづつ、ほうううううう……クウ、クウうううう……つつ!♥」

一度射精を味わった肉体は、砂漠でオアシスを求める遭難者のように、凄まじい飢餓感に襲われる。

頭の中はザーメンをブチまけることしか考えられず、ビクンッビクンッと血管の浮き上がった雄幹が蠢いた。

(ダメ……射精したくて頭が変になりそう。これが媚薬の力なの!?)

自身の肉体の変化にアルカナムーンは戸惑う。どれほど絶望的な戦いでも挫けなかった鋼の精神力が、脆くも崩れ去ろうとしている。

釜で茹でられているように体温が上昇を続け、亀頭がビクついた。

「ひぐ、くうううう……あうつ、うううううつつ! はぎ、クウウウウウウウウウウウウーッ!」

(悔しい……でもイクッ! お尻気持ち良くて我慢できない!)

強烈に振動するおしゃぶりが美熟女戦士の尻穴を狂わせる。ピンク色の直腸壁が妖しく

蠢き、ペニスで突かれているような快感を味わう。

鈴口から透明な雄液が滲み、睪丸から絶頂の衝動が込み上がってくる。意識が七色に点滅し、身体が浮遊する感覚を覚える。

そしてすべてが臨界に達した時――。

………ッ！ ………ッ！ ………ッ！

「ッッ!? ど、どうして出ないの!？」

射精が訪れずアルカナムーンは困惑する。屈辱のザーメン排泄を受け入れたはずなのに、待ち望んだ絶頂を味わえない。

「待て」のまま焦らされたフタナリ肉竿が悲しそうにビクつく。

「私が生やしたおチンポなんだから私が管理できるのは当然でしょ？ そう簡単に出させてあげないわよ♥」

アルカナムーンが天井の鏡を見ると、金玉の部分にハート形の淫紋が光っていた。この淫紋が射精を阻害しているのだ。

「出せないって苦しいわよね。おチンポもしょんぼりしちゃってるわ」

子供らしい無邪気な笑顔でシエルは言う。アルカナムーンは言い返すこともできず、悔しそうに唇を噛んだ。

「イキたいなら赤ちゃんの真似でもしてもらおうかしら。バブバブーってみつともなくおねだりするの。それが条件よ♥」

「あなたの言いなりになるとでも思っているの。アルカナの戦士を舐めないでちょうだい」  
「嫌ならいいのよ。もつと焦らすだけだから♥」

「はうつ♥ いや……あああああああああつっ！♥ 振動させないでええええええええええつっ！♥ へお♥ んおおオオオオオオオオオオッ♥」

淫紋の射精禁止効果が消えると、おしゃぶりバイブレーションの快楽が再び襲ってくる。意識が雄欲に染め上げられ、情けない嬌声を上げてしまう。

前立腺責めによってフタナリ肉竿は痛いくらい勃起し、天狗の鼻のごとくそそり立った。本来到達しているはずの射精をできないことがもどかしく、熟れた肢体がせつなげにビクビクと震える。

「あひ♥ もおおおお♥ んぐッ♥ へああああーッッ♥」

「言う通りにしないなら何時間でも何日でも何か月でも射精は禁止♥ アハハハハ、耐えられるかしら？♥」

「くううううう……っつ！ この外道っ！ ひゃひ♥ あひ♥ ペニスがおかしくなるうううううっつ♥」



無間地獄むけんじごくのような苦しみがアルカナムーンを襲う。一度ザーメンを吐き出す快感を味わってしまった身体は、際限なく次の快美を求める。

イキそうになるとまた淫紋が発動し、射精を封じられてしまう。フタナリ肉竿はもう破裂しそうなほど膨れ上がっていた。

（私は負けない。どれだけ焦らされてもアビスゲートには屈しないっ！）

アライズの研究員たちとの約束を胸に、アルカナムーンはフタナリ拷問に耐え続ける。ライズジエムも想いに反応し、キラキラと星のように瞬いた。



それから三日が経過した。

肛門の振動責めと、射精我慢はまだ続いている。

「あひっ♥♥へおっ♥♥アへおおおおおおおおおっ♥♥イキたい♥♥イキたい  
によおおおおおおおっ！♥♥」

おしゃぶりバイブによる快感と、フタナリアクメできない苦しみで、アルカナムーンの心身は限界に達していた。

焦らされ続けた勃起肉は先走りでビショビショに濡れ、焼けたウインナーのように張り詰めていた。

「ほお♥ んおおお♥ ザーメン出させてえ♥ ふご♥ んおおおおおおおおお  
ーーーっっ！♥ イギたい♥ こんな狂っちゃうううううっっ♥♥」

この三日間、アルカナムーンはおしゃぶりバイブに加えて、スライム、電気責め、戦闘員たちへのパイズリ奉仕など、様々な責め苦を味わってきた。

休むことのない陵辱でまともに眠ることもできず、食事はすべて怪人のザーメンだ。排泄をする時はシエルの許可を取らねばならず、小便と大便是三人以上の戦闘員の前でアヒルのおまるに排泄することを強要された。

ライズジエムは快楽の感情エネルギーで満たされ、戦士として戦うどころか、気持ち良さに腰が抜けて立ち上がることもさえできない。

「も、もう無理♥ 無理なお♥ チンポ汁射精させてえ♥ あぐ、んぐうううううう  
ううううううううっっ！♥」

「何度でも言うけど赤ちゃんになつてくれるなら許可してあげるわ。それ以外の選択肢は認めないけれど」

「うくううううううううっっ！ んぐ、むぐううううう……♥」

この三日間飽きるほど聞いた言葉。頭の中では言いなりになる危険性をわかっていても、溶解した理性は敵である少女の命令に逆らえなくなっていた。

終わりの見えない射精我慢責め。アルカナムーンの頭の中には射精への欲求しかない。そして、美熟女戦士はついに屈服の言葉を吐いてしまう。

「わ、わかったわ！ あなたの言う通り赤ちゃんになる！ いえ、なりまちゅ♡ バブバブしまちゅうつ♡」

「ようやくわかってくれたみたいね。ならとおつても下品におねだりしてもらおうかしら♡ プライドを捨てて射精を懇願するの♡」

「ひゃい♡ 私はおチンポ射精のために赤ちゃんプレイする変態でちゅ♡ 雄ミルクぴゅっぴゅっしたくてたまらないチンポマゾでちゅ♡ はひ♡ んひひ♡ ほおおおおおとおお~~~~ん♡」

恥も外聞もなくアルカナムーンは赤ちゃんの真似をする。すらすらと出てくる淫語は、調教中にシエルから覚えさせられたものだ。

オナニーを禁止された猿のように、肉竿を振りながら媚を売る。シャワーを浴びることすら許されないため、全身から恥汗の臭いがムワツと香った。

「ばぶ♡ バブバブ♡ ムーンのおチンチンイキたいんでちゅ♡ もう焦らされるのイ



やなのお♡　ばぶっ♡　ふううう♡　あふううううう♡」

「アハハ、本当に情けない姿ね♡　それでもアルカナの戦士なのかしら？♡」

「あひいゝん♡　だって射精できないのイヤなんでちゅ♡　ビンビンおチンポせつないんでちゅ♡　お願いでちゅううう♡」

イヤイヤと身体を振り、プルプルとKカップ爆巨乳を揺らしながら、美熟女戦士は媚を売る。

情けない姿を晒しているとマゾヒズムが昂り、さらに先走りと愛液が滲み出す。頭の中が綿菓子になったようで、気持ち良さに抗えない。

「おっ♡　あひおおおおおっ♡　おチンポちゅらいのお♡　出させて♡　早くお漏らちさせてえ♡　くっさいミルク出ちたいのお♡」

「アルカナムーン、貴女って何歳だったかしら？　教えてくれない？♡」

「よ、四十三歳でちゅ♡　子供もいるのにオムツ穿いちやう変態でごめんなちやい♡　射精のためならなんでもしちやうドスケベママなのお♡　おっ、うひ♡　あふうううううバブバブううううっ♡」

「子供がいるのにそんなことしてるのね。恥ずかしくないのかしら？♡」

「死ぬほど恥ずかしいでちゅ♡　でもおチンポ我慢つらいのお♡　カメさんパンパンで壊



「気持ちいいでちゅう♡ ママにオナニー手伝ってもらって嬉しいでちゅう♡ おぎやあ♡  
おぎやあ♡ ばぶうううう♡」

シエルをママと呼び倒錯的な快楽に溺れる美熟女ヒロイン。今年で四十三歳だというのに、初等部に通っていいような見た目の少女に興奮する。

人差し指と親指の輪が肉幹を擦るたびに、得も言われぬ快美が背筋を走る。理性は完全に蕩けきり、ヘコヘコと腰を浮かせる。

もうフタナリチンポを楽にすること以外、思い浮かばない。

「お願いでちゅう♡ イカせて♡ もう無理チンポなおおおおっ！♡ 包茎マライキ  
たい♡ ドスケベ赤ちゃんにぴゅっぴゅっさせてええええええ♡」

「仕方ないわね、射精を許可してあげるわ。最高に惨めにイキなさい♡ 赤ちゃん戦士さ  
ん♡」

「シエルママありがとうございます♡ 射精のご許可嬉しいでちゅう♡ おっ♡ もおお  
♡ くる♡ ザーメン昇ってきまちゅううううう♡ あひ、ウヒいいいいいい  
いっっ！♡」

ガクガクと腰を痙攣させながら、アルカナムーンは絶頂へと向かっていく。シエルが許可を出したことで射精を禁止していた金玉の圧迫感がなくなり、ザーメンがすぐそこまで



昇ってくる。

「くる♥　くるくるくるううううううう　♥　ばぶ♥　ばぶばぶ♥　ンぶううううう  
ううううう　♥」

肛門のおしやぶりバイブと、シエルの手淫が思考を昇天させる。三日間焦らされ続けた  
フタナリ勃起はビンツと直立し、歓喜の瞬間を待ちわびる。

精管がわななき鈴口が開くと、我慢と恥辱で朦朧もうろうとした頭で、アルカナムーンは決壊し  
たダムのように精液を噴き出した。

ブビュツ♥　ブビュツ♥　どぶっ♥　どつぶびゆるるるううううう　♥　どぶっ♥　どぶっ♥  
♥　ドブ、ドブドブドブウウウウウウウ　♥

「イク♥　イクイク♥　ザーメンでりゅうううう　♥　白いおしっこお漏らししちゃう  
ううううう　♥　赤ちゃんの格好で最低のマゾ射精♥　ケツ穴おしやぶりもシエル  
ママの手コキも全部気持ちいいの♥　あひ♥　おひひい♥　いい歳なのにアクメ止まら  
ないでちゅ♥　オバサンなのにバブバブ雄勃起アクメしまちゅううううう　♥  
♥　イグ♥　だらしなないマゾチンポが感謝アクメするんでちゅ♥　おほ♥　おっほオオオ  
オオオオオオオ　♥♥」

人間終了のセリフを吐きながら、アルカナムーンはザーメンを天高く噴き上げた。ドロ

りと煮詰まった精液が、ミトンやよだれ掛けを汚す。

射精我慢からの解放は魂が抜けるほど心地よく、たおやかな美貌はよだれと鼻水にまみれ、瞳は白目を剥いていた。

「あひ♥ あへ♥ へええええ♥」

「まだ壊れちゃダメよ。これからもっともおチンポの気持ち良さを教えてあげるから。アルカナサニーと同じ姿に堕としてあげるわね」

「ひええ♥ おほああああ♥」

フタナリ調教の本番はこれからだと告げるシエルに対して、アルカナムーンは虚ろな笑みを浮かべた。

もう言葉の意味を考える力もない。

「むぐつ♥ むぐうううううつつ！♥」

（快楽に吞まれるわけには……ライズジェムを守らないと。でもおチンポ感じるのとお♥）  
再びスライムが股間に広がり、肛門に挿入されていたおしゃぶりを啜えさせられる。軟体ボディが膣穴を弄り、腸液の味が口いっぱいに広がる。

アルカナムーンは残った理性をすべてライズジェムの防御に回し、快楽の深海に沈んでいった。

### 第三話 母娘オナホール対決

アルカナデュオがフタナリ調教を受けるようになって、一週間が経過した。アルカナムーンは赤ちゃんプレイから解放されたものの、日夜精液を搾られ続けている。

戦士としての力は使えないが、コスチュームだけは元に戻り、白フリルのアイドル衣装が年齢を感じさせないキュートさを演出している。

「んっ、い、イクッ！ イクイクう……ッッ！」

「へへへ、またイッたケオ。もうコンドームが空っぽケオ」

「くうう……ハアハア……」

両腕は頭の上で鎖に縛られ、脚はガニ股のまま枷で壁に張りつけられている。フタナリペニスにはコンドームが着けられ、絶えず電マやローターによる責めを受けていた。

今の射精ももう何十回目かわからない。

「今日はここまでにしてやるケオ。感謝するケオ」

射精済みコンドームの束を鼻先に突き付け、ケイオスは勝ち誇る。いつもならゴミのように蹴散らされる相手を、好き放題に陵辱できる愉悦。

シエルに調教役を任されたことが嬉しくてたまらないようだ。



「うう……あうう……」

（終わった……のね）

一方、アルカナムーンは連日の射精拷問で、消えそうな呻き声をこぼすばかりだ。可憐なコスチュームも精液で汚れ、身体のアちこちに痣ができています。

この状態でも変身状態を維持し、ライズジェムが快楽の感情に堕ちていないのは、彼女の人並み外れた精神力によるものだ。

「続きはまた明日ケオ。もつと搾ってやるから覚悟しとくケオ」

「ねえ、ちよつといいかしら」

「あん？ なにケオ」

「この拘束ってライズジェムの力を弱めているのよね？」

鎖と枷はシエルがアルカナの戦士を捕縛するために開発した特注品だ。鉄をも砕くパワーを抑えるために、エネルギーを相殺する波動を発している。

「当然ケオ。今更なに言ってるケオ」

「じゃあ人の力には無意味ってことでいいかしら。——転身解除！」

アルカナムーンは自ら変身を解き、黒髪の人妻、八雲楓<sup>かえで</sup>の姿に戻る。変身状態との僅かな体形の差が、鎖と枷から手足を引き抜くことを可能にする。

美熟女ヒロインは両手でケイオスの頭を掴むと、無防備な顎<sup>あご</sup>に膝を打ち付けた。

「ケオッ!？」

「しばらくそこで眠っていなさい」

人間より強靱なケイオスも、不意打ちで急所を打ち抜かれてはどうしようもない。昏倒したケイオスを跨ぐと、八雲楓は再びアルカナムーンに変身し、調教部屋を出た。

（サニーはどこなのかしら。早くここから逃げないと）

気にかかるのは自分と同じく、フタナリ調教を受けているであろう娘のことだ。シエルの目的はいまだ謎だが、ペニスを生やされ弄ばれていると思うと、胸が張り裂けそうだ。

（シエルの口ぶりだとそう離れてはいないはず。一体どこにいるの）

数日前の調教で聞き出した情報を思い出す。アビスゲートの要塞は蟻の巣のように入り組んでいるが、アルカナムーンは監視の目をかいくぐり娘を捜す。

そして、ライズジェムの気配が残るドアへ辿り着いた。

（恐らくここにいるはず。罠の可能性もあるから慎重にいかないと）

気絶させたケイオスから抜き取ったカードキーで、ドアのロックを解除する。中に入ると、部屋の奥にアルカナサニーの姿が見えた。

自分がされていたように、鎖と枷で拘束されている。意識を失っているのかアルカナム

ーンに気づくそぶりはなかった。

「サニー助けにきたわよ。今外してあげるから」

「……………」

娘に駆け寄り拘束を解こうとするアルカナムーン。違和感を覚えたのはその数秒後だった。ライズジェムの光が黒くくすんでいたのだ。

「さ、サニー？ まさかこれは――」

「かかったわねママ」

「ぐっ、あううううーっつ！」

自ら拘束を引き千切ったアルカナサニーは、アルカナムーンの鳩尾へ拳を叩き込んだ。みぞおち

想定外の攻撃を受けた美熟女戦士は鳩尾を押さえ、気力で両足を支える。

怪人の擬態でないことは確認済み。アルカナサニー本人の行動であることに、心臓が鼓動を速める。

「サニー、暗黒化したのね」

「正解だよママ。今のわたしはダークサニー。シエル様の忠実な下僕ってこと♥」

黒いライズジェムを胸に、ダークサニーは歪んだ笑みを浮かべる、アイドルめいたコスチュームは、胸元と股間を強調するサキュバスのような衣装に変化し、太いフタナリペニ



スがビンツと上を向いていた。

今の彼女を突き動かすのは正義の闘志ではなく、射精への欲望だ。

「その様子だと人類を裏切ってアビスゲートの仲間になるつもりかしら？ そんなに柔な鍛え方をした覚えはないわよ」

（マズいわね。堕ちたライズジェムを元に戻すには一度サニーを倒すしかない。今の私にそれだけの力が残っているの……？）

ダークサニーの動向を注意深く観察しながら、アルカナムーンは思考を巡らせる。精神が未熟な戦士は、ライズジェムから正のエネルギーだけではなく、負のエネルギーの影響も受けやすい。

このままでは母娘同士で死闘を演じることになってしまう。

「安心してママ。わたしはここで戦うつもりはないから。そんなことしたらお互いただじや済まないでしょ？」

「ならどうするつもりなのかしら」

「ここは平和的にゲームで勝負しようよ。ママが勝てばわたしは元に戻る。逆にわたしが勝ったらママにはアビスゲートへ忠誠を誓ってもらおうかな。みんな準備よろしく」

「了解ケオ！」

ダークサニーが言うと、どこに潜んでいたのかケイオスたちが現れ、オナホールを運んできた。

形は筒状だが横幅が広く、両手で持たなければ支えられそうにない。両端には挿入口があり、中で射精すればどちらからも溢れ出る仕組みだ。

「この貫通タイプのオナホに両側からお互いのおチンポを入れて、先に射精した方が勝ちっていうのはどう？ ママは正のエネルギーをザーメンに込めて、わたしは負のエネルギーを込めるの。これならお互いのおチンポからエネルギーを注ぎ込んで、善にも悪にも堕とせるしわかりやすいでしょ？」

（この子なんてことを言い出すの）

快活なアルカナサニーの言葉とは思えない提案に、アルカナムーンは驚愕する。きょうがく理屈としてはその通りだが、母娘でフタナリチンポを挿入し合うなど正気の沙汰ではない。

調教で失われつつあった羞恥心が、再び燃え上がってくる。

「断ったりはしないよね。ふつーにわたしと戦う体力つてもうないだろうし」

「……わかったわ。あなたのゲームに乗ってあげる。すぐにその悪趣味な服を捨てさせてあげるわ」

自分のコンディションは筒抜けのようだ。アルカナムーンは覚悟を決め、オナホールゲ

ームに挑む。

公平な勝負とはとても思えないが、娘を取り戻すためには勝つしかない。

「まずはおチンポ挿入ターイム♥」

「うう……んうう……」

ダークサニーとアルカナムーンは互いに向き合い、一つのオナホールの前後からチンポを挿入した。

人肌に温められたローションがヒダにからみ、フタナリ勃起に得も言われぬ快樂をもたらす。

だが、それよりも心をかき乱すのは、対面にいるパートナーの存在だ。自分一人が調教されているよりも、深いダメージが突き刺さる。

「合図したらオナニースタートね。準備はいい？」

「ええ。必ずあなたを元に戻してみせるわ」

「キャハハ！ できるかな？ じゃゲームスタート！」

「んっ、……んんうう……っっ！」

ダークサニーの言葉を皮切りに、アルカナムーンは恐る恐る腰を動かし出した。シリコンの柔らかな肌触りに、ゾワリと背筋が震える。



緩やかなピストンでもヒダの吸い付いてくる感触に、股間が疼いてたまらない。

ずちゅ……♡ズリユ……♡ズグチュウ……♡

「あうっ、あつ、ううううううううっ！」

「気持ち良すぎて腰が引けるのはわかるけど、そんなオナニーで射精できるのかな？」

「あう、はううううん！ ど、どういうこと……？」

ダークサニーの不可解な口ぶりに、アルカナムーンは疑問を覚える。射精を我慢するゲームならともかく、相手より先に射精することが勝利条件なら、スローペースなオナニーでも感じていればいいはずだ。

実際にアルカナムーンのフタナリ肉竿は痛いほどにフル勃起し、早くもカウパー腺液を滲ませている。

「ママは今すごく射精したくなってるじゃない？ でもイクところまでは届いてないと思うんだよね♡」

「それは……う、ひゃううううううん！ た、確かにそうだけど……」

いつものように鈴口までザーメンがせり上がってくる感覚はあるのに、どれだけピストンを繰り返しても射精に達しない。

貞操帯を着けているようなもどかしさに、もじもじと太腿を擦り合わせる。



「お、ペースアップ？ わかってきたみたいだね。でもわたしだって負けないよ♡ んう♡ はううん♡ おチンポキクううううううううーっ♡」

アルカナムーンのピストン運動に合わせて、ダークサニーも腰を振る。二本のフタナリチンポは淫らな音を奏で、精管を歓喜にわななかせた。

通常ならすでに射精している抽送回数に、脳が落雷を受けたような痺れしびを覚える。

「はあううつ、クウウウウウウッ！ もっと速く動かないと……」

「わたしも頑張っちゃうよ♡ あんっ♡ あんっ♡ あうおおおおおん♡」

母娘ヒロインは先を争うように腰を打ち付ける。包茎の皮は剥け、むき出しのピンク龟头が淫猥な光沢を帯びる。

そして、オナホルの内部が貫通しているということは、深く突き入れると互いの龟头が接触するということだ。

触れ合う瞬間、互いの脳髓に火花が煌めいた。

ズリュ♡ ジュ♡ ズチュググ♡ ヌップン♡ ジュブ♡ ドチュブ♡ ドチュドチュ♡ ドム♡ ドンドンドンッ♡

「はぐ、ひやうううう!! あっううううう……っっ!♡ おチンポ当たってるうううううううう……っっ♡♡」



「ひぐう、っ……はううううううう……んっっ！♥ きたきたきたあああああああ  
ああっ♥ ほっおおおおおおおおおっ♥♥」

敏感なフタナリチンポ同士がぶつかり合い、母娘ヒロインは雌猫のような声を出す。初めて触れる自分以外の亀頭の感触は、涙が出るほど気持ちいい。

馬のように口をすぼませ、甘い吐息を漏らしてしまう。

「おっおぐうううう……♥ これすごい♥ あう、んっ、ンクうううううううう  
うっっ！♥ サニーのおチンポ柔らかくてたまらない♥」

「中で擦れてぶつかって……股間にジンジンくるうううううううう♥ 最高♥ 最高♥  
おチンポキッスさいこう♥ へおっ、ほっおおおおおおおおお♥」

フタナリチンポをぶつけ合いながら、ケダモノのような声を出す母娘ヒロイン。ローションとカウパー腺液が混じり合い、淫猥な水音が大きさを増す。

より強い快楽を求めるためにガクガクと腰を振り、傍目<sup>はため</sup>には滑稽なダンスを踊る。亀頭が火照り、カリ首が大きく張り出した。

「ンンッ♥ こんなのもう射精したくて限界なんだけど♥ ママって包茎チンポのくせに  
超太いんだもん♥ あう、くっううううううっ！♥♥」

「包茎はあなたも同じでしょ♥ どん♥ あううううう……♥ くう、んっううううう

ううううつつ！♥ これでもまだイケないなんてえ♥」

淫妖な笑みを浮かべ、ダークサニーは腰を振る。扇情的に露出した肌を赤く火照らせ、艶やかな紅蓮のポニーテールが舞う。あで

腋窩には汗の玉がいくつも浮かび、濃厚な雌の匂いを香らせる。勝気な少女の肉体は堕ちたことで、濁った性欲に満ちた淫婦になるうとしていた。

「はうつ♥ んうううううう♥ おっ♥ おぐううううううつつ！♥ んお♥ あつふううううううつつ♥」

「うわ、すつごいペース。なんか猿みたいなんだけど♥」

「ぐっ、うるさいわよサニー♥ これはあなたのおチンポが悪いのよ♥ 我慢汁まみれのニルニルを私にぶつけてくるからあ♥ こっちもガチピストンがやめられないのよ♥ あう……んんう♥ おっ♥ おっおほおおおおおおっ♥♥」

股間を中心にしてこみ上げてくる淫悦が、アルカナムーンを狂わせる。高速腰フリの反動で呼吸が不規則に乱れ、目尻には涙が浮かぶ。

一突きごとに強くなる快感を、尻穴を引き締めて耐える。絶頂の波は絶え間なく押し寄せ、二重まぶたがパチパチと瞬きを繰り返した。

「あうつ♥ おおっ♥ ほっおおうううううつつ♥ ママには悪いけどわたしは負

けないわよ♥ くう、ウウウウ……つつ！♥ パコパコチンコキiiiiiiii

「んぐううう……戦士としての年季を見せてあげるわ。っあ、ひやうあああああゝゝ  
ゝゝん♥ ザーメン昇ってくるうううううううつつ！♥ へお、あつふううう  
ううううつつ♥♥」

アルカナデュオはへこへこオナニーをしながら、お互いの信念をぶつけ合う。正と負、  
対照的なエネルギーはザーメンに充填され、睪丸の中で渦を巻いていた。

焦らされ続ける脳はトロトロで、一秒でも早い射精を待ち望む。GカップとKカップの  
バストも激しく弾み、谷間が欲情を煽る。

「はう、んんっ♥ おっぐううううううつつ♥ ほお♥ オオオオおっ♥ んん  
んんんんんつつ♥」

（もうすぐそこまできてる♥ イキたい♥ ヨーグルトみたいにドロドロのおチンポ汁ぶ  
ちまきたい♥）

フタナリ肉竿の中をザーメンがうねり狂い、ダークサニーは顔を真っ赤にして絶頂を待  
ち望む。

ピンク色の亀頭が蕩けきり、裏筋がビクビクと蠢動する。抜き差しするたびに香るカウ



パー腺液と恥垢の淫臭が、少女の嗅覚を酔わせた。

堕ちたことで射精に対する嫌悪感も消え去っている。

「おぐっ、っウ、アアうウウ……っっ♡ ひゃう♡ あああ……はっくうううううううううっ♡」

（金玉からぐんぐん精子が昇ってきてるの♡ イキたい♡ ブリュブリュってスケベ雄汁ぶちまけたいのお♡）

はしたない言葉を頭の中で並べながら、アルカナムーンは淫悦に翻弄される。包皮の剥けた敏感な亀頭が、オナホルの内側でシェイクされる。

精子を搾り取ることを目的にした複雑なヒダの構造が、三六〇度全方位から快楽を伝えてくる。

意識が射精することだけに向けられ、肉幹がビクつく。娘を救うためという大義名分が、これまで抑制されていたオナニーを肯定する。

シエルの思惑には乗らないという当初の志も、今は考えられない。

「ああ、もうダメっ♡ 気持ち良すぎて頭おかしくなる♡ 出て♡ 早く出てええええええええええっ！♡」

「これ以上我慢なんておチンポ狂ってしまうわ♡ もう無理♡ ザーメンがグツグツ煮え











「おう、んくううううう……♡」

射精が終わっても腰フリを止めることはできず、狂ったようにフタナリチンポを擦り合わせる。

肉幹は中々硬さを失わず、淫らなコミュニケーションが終わるには三分もかかった。ようやく頭が冷えてくると、ゲームの勝敗が気にかかってくる。

「あうううう……あ、うう。ど、どっち？」

「ハアハア……どっちが……勝ったの？」

「見てたけどまったく同時だったケオ。だからどっちの姿も変わってないケオ」

ケイオスに言われて自分の姿を見る母娘ヒロイン。ダークサニー、アルカナムーンどちらのコスチュームもゲーム前と同じだった。

「くうう……つまり引き分けてこと？ そんなの納得いかないんだけど」

「っ……私も同感ね。あなたをそのままにしてはおけないわ」

「じゃもう一ゲームね。今度は絶対に負けないから」

「望むところだわ」

二人の意見が合致し、すぐに次のゲームが始まる。ダークサニー、アルカナムーンはフタナリチンポを勃起させると、新しいオナホールに挿入した。

形は同じだが先程よりも狭い構造に、早くもカリ首が張り詰める。

「いつでもかかってきなさい」

「それじゃゲームスタート……の前にプレゼントをあげようかな」

「ン、んんうっ!? な、なにをするの!？」

アルカナムーンの頭をすっぽりと覆う形で、ケイオスが透明な箱を被せた。箱の天辺には穴が開いており、くじ引きの箱を想起させる。

「これがプレゼント? なにを企んでいるのかしら」

「この姿になっても記憶はそのままなんだよね、だからママとの思い出も全部覚えてるよ。一緒に訓練したこともよく使ってるコスメ、パパの好きなところもね」

「その姿で私たちの思い出を語って欲しくはないわね」

「それから嫌いな生き物も知ってるよ。ママってさあ、蜘蛛くもが嫌いだったよね♥」

ダークサニーの言葉と同時に、箱の穴に袋が被せられる。そして、袋の中に詰まっていた大量のタランチュラが、箱の中に雪崩なだれ込んできた。

「ヒッ!? あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!? いや、

イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

目を見開いてアルカナムーンは絶叫する。この世で一番嫌いな生き物、映像を見るだけ



でも鳥肌が立つ蜘蛛が顔に触れ、今この瞬間にも気を失いそうだ。

タランチュラは黒い波のように箱の底を満たし、ウゾウゾと蠢いている。その身体には黒々とした毛が生え揃い、八本の脚がせわしなく動いていた。

「いやああああああああっ！ は、早くどけて！ ここから出て行ってえええエエエエエエエエエエッ！」

「キャハハハハ！ よく考えたら正々堂々ゲームする義理なんてないよね♥ 蜘蛛まみれでオナニーできるならやってみれば♥ それじゃ今からゲームスタートだよ！♥」

「うううう……ひ、卑怯よ！」

ダークサニーは半狂乱になっている母親を嘲笑い、ピストンを開始した。あざわらアルカナムーンは出遅れつつも、懸命に腰を動かす。

しかし、顔に蜘蛛が触れるたびに、ゾワゾワと背筋が粟立ち集中できない。両腕はオナホールを支えなければならず、逃げ場のない地獄のような状況に立たされる。

「他のことなんでもするから！ お願いだから蜘蛛をどけてちょうだい！」

「ゲームに勝てたらママの言う通りにしてあげよっかな。ほらほら、急いだ方がいいんじゃない♥」

「わ、わかったわ。勝てばいいのね!？」

ダークサニーに言われるがままに、アルカナムーンはフタナリチンポを動かす。恐怖で萎えていた肉竿を必死で扱き、再び勃起させようとする。

普通ならオナニーなどしている状況ではないが、このままでは気が狂ってしまふ。

「んんんうううううっ！ 早く！ 早く勃起してえっ！ ひい、こっちに近づかないでっっ！」

五本の指でシリコンをより密着させ、ジュコジュコと激しく扱く美熟女ヒロイン。ザーメンの残り汁と包茎の皮を擦り合わせ、急速に興奮を高めていく。

顔に触れる蜘蛛が意識を乱すが、必死にエクスタシーを感じようとする。

「ひいひいひいひい……来ないで……来ないでえっっ！ んっ、はあ……あうううううう……っっ！ はう、んくうううう」

蜘蛛が首の周りを動かたびに、麗しい美貌が引きつる。まだ箱の底を這っているだけで、顔に登られたわけではないが、そうなる前にゲームを終えたい。

こんなおぞましい生物と同じ空間にいるなんて、気が狂いそうだ。

（うう……なんて気持ち悪いの。は、吐きそうだわ）

子供の頃、鬼ごっこの最中に誤って蜘蛛の巣へ顔を突っ込んだことが、すべての始まりだった。

顔面にへばりついたジョロウグモの姿は、幼いアルカナムーンにトラウマを与えるには十分だった。

如何なる怪人にも冷静に対処できるベテラン戦士でも、蜘蛛にだけは恐怖で身体がすぐんでしまうのだ。

「ほご♥へお♥んんおおおおおおおおっつ！♥勃起♥勃起したあ♥ンウツ♥んふうううううう……♥」

フタナリ肉竿を勢い良く扱き、獣のような声を上げる。つい数分前に射精したばかりだが、急速に性欲が高まっていく。

肉幹がビキビキと音を立てて硬く反り返り、ヒダを使って剥かれた包皮の下からピンク龟头が露出する。

「早くイッて！ イッて！ んんうつ♥ほっ♥おおおおおおおおっつ！♥早くう……あう、ンクウウウウウウウウウッ♥」

オナホルの射精遅延機能を恨めしく思うほど、絶頂の訪れを強く切望してしまう。シエルに調教を受けている時はあれほど我慢していたのに、今は一刻も早くザーメンをぶちまけたくてたまらない。

ダークサニーの龟头とぶつかることも、最早まったく気にならない。射精衝動を高める



こと以外に、大切なことなどあるわけがない。

「はう……うつ、あうううううつつ！♥ クツ、ンンンンツツ！♥ イッて……もう  
イッて！ あんっ♥ むぐうううううくつつ♥」

「頑張ってるじゃん。これくらいの妨害じゃ生ぬるかったかな？ みんなー、もっとスキ  
ンシップしよっか♥」

「えっ。う、ウソ……ウソでしょ!? あああ……ヒツ、ヒイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイッ!?」

ダークサニ一の命令に反応して、蜘蛛たちがアルカナムーンの顔を登り始めた。滑らかな  
頬に毛むくじやらの脚が触れ、カサカサと音が聞こえてくる。

皮膚に伝わるこそばゆいような感触に、全身の産毛が逆立つ。表情筋が強張り、喉奥か  
ら引きつった声を吐き出さずにはいられない。

「いやあああああああつつ！ やめて！ こっちにこないでええええええええええ  
ええええつつ！ アアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

「んー、いい声♥ すつごくおチンポに響くよ♥」

「やつ……目の前に来ないで！ あひあああああああああああつつ！ お  
腹を見せないでエエエエエエエエエエツ！ うえ……うえええええ……」

壊れたようにフタナリチンポを扱きながら、アルカナムーンは頭を振る。この世で最も嫌いな生物の裏側を、間近で見せられる恐怖。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいっ！　そ、そこに入れないで！　いや……オアアアア  
アアアアアアアアアアアアッ！　あひ……んおおおおお♥」

身体の外側だけでなく内部まで陵辱され、目尻から涙がこぼれた。戦士としての矜持など忘却し、一心不乱に亀頭同士をぶつける。

「みんなーママのお口に入っ  
ていいよ♡  
ど  
ん  
な  
り  
ア  
ク  
シ  
ヨ  
ン  
か  
わ  
た  
し  
に  
見  
せ  
て  
♡」

アルカナムーンの口内に、何匹もタランチュラが侵入してくる。内部から襲い来る快美と恐怖の波濤はとうによって、一秒も持たず理性が崩壊する。

思考回路にバグが発生し、美熟女ヒロインは混乱による失禁を迎えた。

チヨロ……ジョロロ♥ ショワ♥ ショワワワア~~~~ツ♥

「うわ、きったな。なに漏らしてんのよ」

「んひひひひひひひひひひッ♥ あう、ぐううう……ンンンンッ♥ 蜘蛛いや

……いやなのお……おしっこ止まりやない♥ お漏らししちゃうううう♥」

失禁の解放感に身体をビクつかせ、腰を振るアルカナムーン。溢れたおしっこはオナホールから漏れ出し、二人の足元を濡らした。

「おつぐ♥ へお♥ いひひひひひひひひひひッ♥ 口かりや出てい

つてえ……んお♥ おおおおおおおおおおつっ!♥」

「あれ? ママ笑ってるの? もしかして壊れちゃったかな♥」

「あひ♥ あはははははははははは♥ 蜘蛛がウゾウゾって舌の上歩いてりゆのお♥ お

つ♥ おつ♥ もおおおおおおおおおおつ♥ 狂う♥ 狂う♥ 脳みそもおチンポも

狂っちゃうううううううつ♥ うえっ♥ ぶえっ♥ おげっへええええええええ

えええつつ♥♥」

ダークサニーに顔をのぞき込まれ、半笑いになったマゾ顔を観察される。凜々しい容貌は涙と鼻水にまみれ、ぐしよぐしよになっていた。



フタナリチンポは痛みを覚えるほどにフル勃起し、ダークサニーのチンポと擦れるほどだ。舌に触れる蜘蛛の動きに合わせて、亀頭や睪丸が震えた。

「んっ♡ んんっ♡ ングうううううううううううーっ♡ もう来ないでえ  
止めてえ♡ 私の顔を這わないでええええええええええっ♡ ああっ♡ んあううううう  
ううううっ♡」

無数の蜘蛛が顔に集まり、アルカナムーンは喉を哽らす。口に残った蜘蛛は丁寧に喉奥を撫で、鼻やまぶたも毛むくじやらの脚で擦られる。

ブロンドのロングウェーブにも蜘蛛は入り込み、頭皮の上でカサカサと音を立てた。呼吸が止まりそうになる淫辱の連打に、金玉はプルプルとダンスを踊った。

「さつきから腰止まってるじゃん。あんまりヌルゲーだと面白くないし、もっとわたしを  
楽しませてよ♡」

「あひっ!? い、今動かれたら……ほっ♡ んおおおおおおおっ♡」  
ダークサニーはオナホールを腰に密着させると、ピストン運動に合わせてドチュドチュと動かし始めた。

止まっていたアルカナムーンのフタナリチンポも強制的に擦られ、淫悦の雷が股間を直撃する。







に墮ち、肉幹がビクンビクンツと反射を繰り返す。

「あへ♥ あへ♥ うへええええ♥」

「んっ、エネルギーがおチンポから入ってくる！ アアアアアアアッ！」

ザーメンに込められた正のエネルギーが、フタナリチンポからダークサニ―の身体へ吸収されていく。

ライズジェムが再び光り輝き、サキユバス衣装が元に戻っていく。

「——あ、あれ？ ママ？」

「あへえ……よ、よかったわ。戻ってきたのね」

「ママッ!」

娘が正気を取り戻したことに安心し、アルカナムーンはその場で頽くずれた。アルカナサニ―は急いでそばに駆け寄り、箱を割って蜘蛛を追いかう。

「ママしつかりして！ ごめん。わたしのせいでこんなことに……」

「いいのよ……サニ―。私は疲れたから少しだけ休むわね」

「——ッ!!」

緊張が解けたのか、アルカナムーンのライズジェムは急速に光を失っていく。サキユバスのような衣装に包まれていく母を、アルカナサニ―は抱きしめた。

## 第四話 恥辱のフタナリ謝罪配信

ダークサニーとアルカナムーンがゲームを開始する一時間前。

アビスゲート日本侵略支部、逆三角形のピラミッド中央に位置する特殊保管庫に、シエル・エル・ロータスはいた。

保管庫には機械で組み上げた台座があり、その頂点には紫電を纏った黒い小箱が浮かんでいる。

「実験は最終段階に入りました。アビスナンバーズの誰よりも早く、このシエルが貴方様を封印の鎖から解き放つてみせましょう」

普段の不遜な態度からは想像もできないほど、シエルはうやうやしく小箱に頭を下げる。その表情には教祖に言葉を賜った信者のような悦びが表れていた。

「御姿を拝見できる時が待ち遠しいです。我らが神よ」

そう言うとき、シエルはアルカナデュオから採取したバケツ一杯のザーメンを、台座の前に供える。

すると小箱の表面に血管が浮かび、ゴクゴクと飲み干すかのごとくザーメンが吸収されていった。

小箱の中に封じられた気配が強さを増し、心臓のように鼓動を打つ。その様子を見たシエルは我が子を見るように微笑んだ。



「あらもう終わったの。中々面白い見世物だったわよ」

「……なにしにきたわけ」

気絶したアルカナムーンを抱きかかえるアルカナサニーの前に現れたのは、一番声を聞きたくなかった相手、シエルだ。

入ってきたドアはケイオスたちで固められ、脱出は難しい。

「なについて実験の結果を見届けに来たのよ。二人とも堕ちてくれれば良かったんだけど、母の代わりに娘が元通りじゃね。まったく、ままならないものだわ」

「実験ってわたしたちをなんだと思ってるのよ！」

「この星の根源に繋がる鍵とだけ言っておくわ。その時が来るまで貴女たちは大切なお客様なの」

モルモットだと嘲笑されると思っていたアルカナサニーは、思わぬ答えに困惑する。一



瞬見せた侵略者とは思えない穏やかな眼差し。

単なるサディストよりも、不気味なものを感じずにはいられない。

「おしゃべりはお終い。調教の時間よアルカナサニー」

「また恥ずかしいことをさせるつもりなんですよ。わ、わたしは負けないわよ！　どんなにあんたたちが強くても抵抗してやるんだから！」

「従うなら貴女のママを元に戻してあげてもいいわよ。堕とすのは簡単だけど正のエネルギーでライズジェムを浄化するのって難しいのよね。新米の貴女にそんな高度なことができるとは思えないけれど」

「そ、それは……」

痛いところを突かれ、アルカナサニーは口ごもる。自分を元に戻した方法と同じことを、アルカナムーンにできるとは思えない。

今は気を失っているが、目を覚ませばシエルに服従してしまう可能性もある。

（わたしと違って簡単に敵になったりはしないと思う。でもママをこのままにしておくなんて……）

ライズジェムが快楽に堕ちたとしても、寝返るとは限らない。しかし、尊敬する母親が自分と同じような痴態を晒す姿は、どうしても見たくなかった。

数十秒間の逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>のあと、アルカナサニーは口を開いた。

「いいわ。あんたに従ってあげる。その代わり約束は守ってよね」

「もちろんよ。ここで貴女に暴れられては困るもの」

この調教部屋と小箱の置かれた要塞の中心部が、直線状に並んでいることをアルカナサニーは知らない。

斯<sup>か</sup>くして、炎のアルカナの戦士はさらなる恥辱に自ら足を踏み入れた。

「で、なにをやらせるつもりなのよ」

「それはね」

シエルはアルカナサニーの耳元に顔を近づけると、小声で囁<sup>ささや</sup>いた。快活な美少女戦士の頬が、みるみるうちに紅潮していく。

「そ、そんなことするの!? この変態っ!」

「ならさっきの言葉は嘘ということね」

「っ……わかったわよ。やればいいんでしょ! やれば!」

選択の余地などあるはずもなく、鬼畜少女の策略に搦め捕られる。アルカナサニーはいくつか指示を受けると、渋々頷いた。

その間に扉の前で待機していた大勢のケイオスたちが押し寄せ、カメラや三脚、デイス

プレイ、レフ板などの機材を手際よく設置していった。

「始めるわよ。準備はいいかしら？」

「いいけど、これが終わったらあんた覚悟しなさいよ」

「配信スタートケオ！」

カメラが回り、ディスプレイにアルカナサニーの姿が映る。シエルの調教、それは『アルカナサニー変態謝罪配信』というものだった。

動画配信サイトをジャックし、サイトの登録者にアルカナサニーのフタナリチンポを見せつけるつもりなのだ。

日本だけではなく海外の視聴者もいるため、恥ずかしい姿を世界規模で拡散されてしまうのだが、美少女戦士に拒否する選択肢はなかった。

「えっと、これもう始まってのよね？」

「いいから挨拶しなさい」

「は、初めましてアルカナサニーだよ。わたしのこと知ってる？　って知ってるよね」

アルカナの戦士の活躍は日夜ニュースで報道されている。この時も一週間以上姿を見せなかったアルカナサニーの生放送というビッグニュースに、世間は大騒ぎだったのだが、本人は知る由もない。



「今日はみんなに謝りたいことがあつて配信してみたんだ。びつくりするかもしれないけど冷静に聞いてね」

『え、どうということ？ なにが起こってんの？』

『失踪の説明か？』

『他の配信見れないんだけど。運営仕事しろ』

など様々なコメントが画面の横を流れていく。

（うわ、すごい速さでコメント流れてる。視聴者数も百万、百十万ってどんどん増えるし、こんなにたくさんの方の前でするの……？）

驚異的な注目度の高さにジットリと汗が滲む。シエルやケイオスだけでなく、不特定多数の人々に痴態を晒す緊張感。

アルカナサニーは一度深呼吸すると、意を決して口を開いた。

「実はわたしフタナリなんだよね。怪人と戦ってる時もホントはおチンポシコシコしたくて我慢できない変態女なんだ♥ 隠していてごめんね♥」

アルカナサニーはスカートを捲り上げると、スパッツをもっこりと盛り上げるフタナリチンポを見せつけた。

数えきれない人間に恥部を開帳する屈辱に声が震える。視聴者は驚愕し、目で追えない

速度でコメントが流れていく。

「今からアビスゲートさんにも手伝ってもらって、わたしの変態っぷりを全部正直に見せちゃうわよ。エッチなシーンもたっぷりだから絶対録画しなさいよね♥」

アルカナサニーは身体を火照らせカメラにウインクする。興奮でフタナリチンポは早くも先走りが滲み、パンティを濡らした。

コメントは、

『どうしてアビスゲートが!?!』

『嘘だろ。シエルにケイオスまでいるじゃねーか!?!』

と大混乱の真っ最中だ。

(みんなびっくりしてる。そ、そうだよね)

アルカナデュオを信じて応援してくれた人たちのことを考えると胸が痛くなる。しかし、もう逃げることはできない。

「まずはわたしのブラジャーを公開するね。んつと……はい、こんな感じでーす♥」

アルカナサニーはブラジャーのホックを外すと、腋の下からスルスルと取り出した。純白のレースブラが衆目に晒される。

「大きなブラジャーね。カップ数はいくつなのかしら？」

「じ、Gカップかな。巨乳だからよくクラスメイトにも見られちゃうんだよね。あ、みんながわたしのおっぱいシーンばかりまとめてるのも知ってるんだから♥」

「フフ、道理で馬鹿みたいに弾んでいるわけだわ。ついでにアルカナムーンのカップ数も教えてもらおうかしら」

「ムーンはKカップだよ。たぶん頭よりもおっぱいの方が重いんじゃないかな♥」

自らカップ数を公開し、羞恥に悶える美少女戦士。コメントの反応が性的に見られていることを自覚させ、顔から火が出そうだ。

マゾヒズムに刺激された肉体は乳首を勃起させ、さらに卑猥な視線を集めた。

「次はパンツね。うんしょつと。はい、これがわたしのパンツだよー♥」

スパッツとパンティを同時に脱ぎ捨て、アルカナサニーはパンティだけを両手で広げた。ブラジャーと同じ純白のレース下着が晒される。

「みんなはこんな可愛い下着を穿いてると思ってなかったでしょ。これけっこう気に入ってるんだよね♥」

「表もいいけどクロッチの裏側も見せてもらおうかしら。どんないやらしいシミが滲んでいるのか見せなさい」

「うっ……こ、これでいいかな？ おチンポ勃起してるからエッチなお汁がついちやって



恥ずかしいんだけど♥」

正義の变身ヒロインは、先走りの滲んだクロツチをカメラに映した。発情の証拠を不特定多数に視姦され、淫辱の炎に全身を焼かれる。

フタナリ肉竿にはメキメキと血管が盛り上がり、鈴口からは卑猥な匂いを香らせていた。睨丸も急速に精子を生産し、もうこのまま射精したいとさえ思ってしまう。

「次は謝罪の気持ちを表すために、ケイオスのお尻の穴をしゃぶってもらわよ」

「アナル舐めで反省していることを示すわけね。望むところなんだから」

まったく意味のわからないことを言いながら、アルカナサニーは指で作った輪を口に近づけ、ジュポジュポとフェラチオのジェスチャーをする。

『なんでアビスゲートの言いなりになってるんだよ!』

『もしかして洗脳されているんじゃないか?』

『ぶっちゃけこういうシチュ好みだわ』

『すげえサニーちゃんのアナルフェラ見れんのかよ』

と、驚きつつも露骨に性欲を露わにする者が増えてきた。

「さっさとしゃぶるケオ」

「そ、そうね」

（うう、臭い。ちゃんと洗ってるわけ!!）

アルカナサニーはしゃがむと、ケイオスの肛門に顔を近づけた。形は人間のものと変わらないが、やや黄緑がかっている

タイツの中で蒸れているのか、すえた臭いが鼻を突いた。

「じゃあ……いくわね。あむ……っ♥　ちゅ、はぶ、んうううううう♥」

菊皺に舌を挿入し、アルカナサニーはアヌス奉仕を開始した。大便の拭き残した塩辛い苦みが、ピリピリと舌を刺激する。

今までなら単純な破壊行為しかできず、雑魚ざこと一蹴してきた相手。知能の低い戦闘員の肛門を舐めさせられる屈辱に、怒りで臓腑が熱くなる。

「ふあろ……はぶう、んちゅ♥　ちゅううううん♥　れろ、ふえろ♥　んぶ……れろおちゅろお♥　わたし初めてだけど頑張るからね♥　お尻すっごく気持ち良くしちゃうんだから♥　ちゅろ、ちゅろ♥　ちゅろおお♥」

チロチロと舌を動かし、初々しいケツ穴しゃぶりを配信してしまう美少女戦士。排泄器官を舐めるという変態行為に、屈辱を覚えつつも感じてしまう。

画面の向こうではファンたちが阿鼻叫喚の様相を呈しているのだが、今の彼女にはケイオスを悦ばせることしか頭にない。

「じゅじゅ♡ ちゅじゅじゅ♡ ふえろ……ふえろふえろ♡ れろ、レロレロレロレ口お♡」

「フフ、すつごくエッチ音がしてるわよ。そんなにアナル舐めが好きなんて知らなかったわ♡」

「ふあい……好き♡ んぶ、んぶぶ♡ ちゅぶ、ちゅぶ、アナルしゅきなのぉ……ちゅぶふうううう……つつ♡」

（シエル……後で絶対に燃やしてやるんだから）

肛門の裏側に舌を差し入れ、内側から菊皺をマッサージする。ヌメヌメした直腸をかき回し、口全体を使って奉仕する。

溢れた腸液と唾液が混ざり合い、口の中はグチョグチョだ。

「ずちゅ、ぞちゅ♡ ずぞぞ♡ ふえろ……ふえふえろ♡ あん……はああん♡ じゅちゅうううん♡」

（臭い……汚い……もう最悪の気分なんだけど。うう、でもこんなので勃起しちゃってる♡ 変態なことしてるのにイキたい♡ 射精したい♡）

肛門を舐めしゃぶるという最低の変態行為で、アルカナサニーは発情してしまう。フタナリ肉竿は硬くそそり立ち、睪丸が歓喜に震える。



生配信という状況が露出快感を後押しし、背筋を破滅的な淫悦が走る。

「ケツ穴の奥まで舌突っ込んでとんだ淫乱ね。よくそれでアルカナの戦士なんて名乗れたものだわ」

「淫乱でごめんなひゃい♥ 正義の味方ぶってるくしえにケツ穴舐めで興奮しひちやうド変態にやのお♥ ひえろ……ちゅう♥ じゅちゅうううう♥」

「まったく画面の向こうの人間たちも呆れてるわよ」

「みんなのことは言わないれ♥ こんな姿みりやれたら幻滅されちゃうう♥ んぶ…… んぶ♥ ぞじゅ♥ れろふえろレロお♥」

改めて視聴者のことに言及されると、ゾクゾクとマゾヒズムが刺激される。日夜報道される正義の美少女戦士が怪人を倒す姿。

そのイメージとはかけ離れた痴態を晒すことに、いけないとわかっていても精管が疼いてしまう。

「あむ、んふうううう♥ ちゅぶ、じょじゅじゅじゅ♥ すじゅ……ぶぶぶぶぶ♥ んぶ♥ ふうううう……♥」

（舌止められない♥ お尻の穴から口が離せないよお♥ この匂い……クセになっちゃう♥）



（イク♥ イクイクイグウウウウウウッ♥ オナラでイッちゃうううううつつ♥ ケツ穴おしゃぶりでイク♥ シコシコしてないのにイク♥ 生配信で汚臭ザーメンどっぴゅんしちゃうよおおおおおおおつつ♥♥）

天高くザーメンを噴き上げるケツ舐めヒロイン。フタナリ調教に慣らされた身体は、より変態的な行為に快感を覚えてしまう。

放屁でイクことは今の彼女にとって極上の快樂だ。

『嘘……本当にイッたの？』

『フタナリってマジで生えてんのかよ』

『こんなのアルカナサニーじゃない！ 偽者だ！』

目を覆いたくなるようなアルカナサニーの醜態。想像を絶する変態プレイに視聴者は失望し、コメントは大荒れだ。

「んう♥ あっうううん♥ はああ……気持ち良すぎ♥」

「謝罪配信なのになにイッてるの？ 心から反省していないのかしら」

「べ、別に今のはそういうわけじゃなくて……」

「反省しないお馬鹿さんにはキツイ罰が必要よね♥ 覚悟しなさい♥」

「ぐひっ!? あんたなに……おつ、おっおっおっオオオオオオオオオオオオオオオオオ」



ッ!？」

シエルに背中を蹴られ四つん這いになったアルカナサニーは、自身の肛門を襲う濁流に野太い悲鳴を上げた。

お尻の後ろに立つケイオスは、二リットルはある巨大な浣腸器を携えていた。この戦闘員がシリンジを満たす乳白色の液体を浣腸したのである。

ジュプ♥ズププ♥ドブ、ヂュウウウウウウッ♥

「はぐっ、ンン……ふう、んううううう！ぬ、抜いて……抜きなさいよ！お……んぐうう……クッウウウウウウッ！」

熱のこもった吐息がアルカナサニーから漏れる。奥歯をギリリと噛み、腹部を襲う違和感を必死に耐える。

浣腸された液体はドロリと重く、まるでヨーグルトを注がれているようだ。それが直腸を通り、身体の中を逆流していく。

便を詰め直されているような感覚に、全身の震えが止まらない。犬のような呼吸に合わせ、菊皺がヒクヒクと蠢いた。

「あう、クッ、くぐふううう……つつ！なんなのよこれ！絶対普通の浣腸液じゃないわよね。ああう、ハウ、おッぐううう……つつ！」

LIVE



00:19:19:27

「貴女のお腹に入っているのはケイオスたちのザーメンを素にブレンドした特別液よ。今日搾ったばかりの新鮮なザーメンだから安心しなさい♥」

「ンンンうう……どこが安心できるのよ！」

下品なケイオスのザーメンが美少女戦士の直腸を苛む。嫌悪感で肌が粟立ち、アルカナムーンのことも忘れて殴りかかりたい衝動に襲われる。

（浣腸されてる姿も配信されてるんだよね……うう、恥ずかしすぎ）

肛門をカメラの前に晒し、生中継で浣腸される恥辱。乙女として死んでも見せたくない姿を見世物にされ、顔から火が出そうだ。

生暖かい液体で腹部が満たされると、ニュポンツと音を立てて浣腸器が引き抜かれた。すぐに浣腸液が効果を発揮する。

「ぐっ、あぎ、あああああああああつっ！ おっ、おっおっ、ふんぐうううううううっ！」

ゴロゴロと遠雷のような音が腹部から鳴り、臓腑をねじ切られるような痛みに悶絶する。平常時なら一目散にトイレに駆け込んでいる状況だが、生配信から逃げだすことはできない。

アルカナサニーの額には早くも汗が浮かび、頬を伝って流れ落ちた。



「ううう……お腹痛い……これキツすぎるんだけど。こんなこととしてどうするつもりなのよ!？」

「貴女の脱糞姿を視聴者たちに見てもらうのよ。本気で謝罪する気持ちがあるなら、それくらいできるわよね♥」

「なんてこと考えるのよ……このクズ! ツ……あうううううう……はう、ンクウウウウウウ……ッ!」

シエルに怒りをぶつける余裕すらも、腹痛の苦しみが削り取る。美少女戦士は内股になりながら、内腿を擦り合わせた、

ピンクの菊皺は呼吸に合わせてヒクヒクと蠢き、淫靡<sup>いんぴ</sup>な香りを醸している。

「ふんっ、んうううう……こんなところで漏らすなんて……あぐ、ッッ、ああああ……ハアハアハア……」

尻穴に全神経を集中して、アルカナサニーは便意に抗い続ける。アルカナムーンを救うためとはいえ、人々の前でザーメン脱糞姿を晒したくない。

アルカナの戦士としてではなく、一人の女性としてそれだけは絶対に無理だ。

「頑張って我慢してるみたいだけど、またおチンポはフル勃起してるわね。こんな状況で恥ずかしくないの、この変態」

『うわ、ビンビンじゃん』

『ええ……あれで感じてるの?』

「みんな違うの! こ、これには理由があつて……」

硬く勃起したフタナリチンポを嘲<sup>あざけ</sup>られ、アルカナサニ一の顔がカアツと赤くなる。フタナリ化によるマゾ調教は、強烈に股間を支配していた。

苦痛がすべて快楽に変換され、欲情が抑えられなくなってしまう。包茎の皮はズリ剥け、先走りが床を濡らしていた。

「なに頑張ってるの? さっさと出しなさい」

「ここでなんて無理に決まってるでしょ! んぐ、あぐううう……お願いだからトイレに行かせて!」

「仕方ないわね。ちゃんとお漏らしできるように手伝ってあげるわ♥」

「んう、ンンンンンンンンう~~~~~ッツ!! いやっ、やめてってば! おおっ、おっ、おおおおおおおっ!!♥」

シエルは羽ペンを取り出すと、アルカナサニ一の肛門をサワサワと撫でた。強烈なくすぐったさが恥部を襲い、笑い声が止まらなくなってしまう。

「あははははははっ! ちよ、ちよつとやめなさいよ! ぐっ、ンンンッ! くふふふふ







れるううううううう ♡ おっ ♡ ほおっ ♡ みんな見ないでええええええええええ  
っっ ♡」

盛大に排泄音を鳴らしながら、アルカナサニーは脱糞する。浣腸されたザーメンは腹の中で固まり、見事な一本糞になってひり出された。

モワツとむせかえるような臭気が立ち昇り、画面の前の人々は顔をしかめる。快楽と恥辱がない交ぜになり、打ち上げられた魚のようにフタナリ肉竿が跳ねる。

脳が蕩けるような淫悦に侵され、口はすぼみ瞳は信じられないほど上目遣いになっていた。

「アハハハハハ！ よくそんな派手に漏らせたわね。それにしてもひどい臭い ♡ 鼻が曲がりそう ♡」

「嗅がないでよ、この変態！ くううう……最悪」

わざとらしく鼻をつまむシエルの言葉に、身体がカツと熱くなる。卑劣な手段を使われたことも相まって、血管がブチ切れそうだ。

『おいおい、マジで漏らしたよ』

『アビスゲートに調教されてるって噂は本当だったんだな』

『なにが謝罪だよ。幻滅したわ』

「み、みんなごめん。変態でごめんなさい。うう、もう嫌あ……」

コメントから軽蔑の感情が突き刺さり、アルカナサニーは頭を下げる。脱糞姿を見られた後ではなにを言っても無意味なのだが、それでも言わずにはいられなかった。

「なに終わったような空気を出してるのかしら。誠意を示すのはここからよ」

「もう十分でしょ……これ以上わたしになにをさせたいわけ」

「まずお尻を見なさい」

「お尻って……っ!？」

言われるがままに自分のヒップを見たアルカナサニーは、驚愕で言葉を詰まらせた。今出したザーメン便が、途切れずに肛門からぶら下がっているのだ。

まるで猫の尻尾が生えてきたような光景。あり得ない事態に頭はパニックだ。

「ウソウソウソウソッ!? どうなってるのよ!？」

「貴女に注入した浣腸液には便を固めて途切れを悪くする薬が含まれているの。便が一本に繋がっているからまだ出し切れてないってわけ」

「まだ……? 冗談よね?」

「私は大真面目よ。今からそれを使って芸をするんだから当然だと思うけど」

シエルの言葉に心臓がドラムを打つ。これ以上の最悪はないと思っていたのに、それが



更新されようとしている。

配信前に囁かれた内容はアヌス舐めまでで、ザーメン脱糞をする予定はまったくなかった。シエルはアルカナサニーの耳に口を近づけ、新たな命令を告げる。

「——わかった？ 今言ってみたにザーメン便を使って芸をしてもらおうわ。ママのためならできるに決まってるわよね♥」

「む、無理……絶対に無理だから！ みんなも見てるのにそんなこと……！」

「アルカナサニー？ 私に二度同じことを言わせないでもらえるかしら」

「ううう……わかった……わよ」

アルカナムーンのことを持ちだされてはどうすることもできない。美少女戦士は人としての尊厳を捨て去る覚悟で、命令に従う。

「今から……ぎ、ザーメンウンチを使って芸をします。フタナリ変態女の無様芸をみんなで笑って……ください」

アルカナサニーはガニ股で頭の後ろに手を組んだポーズを取ると、やや前屈みになりお尻を突き出した。

股の間にはザーメン便がブラブラと揺れている。少女はキュツと唇を引き結んでから、最低の言葉を口にした。

「今日は特別にわたしの新必殺技を見せてあげるわね♥ ひ、必殺……フレア・ザーメン  
ウィップッ！ ふんっ♥ ふんっ♥ ふんううううん♥」

テンションを無理やり上げ、腰を前後に動かし、ザーメン便をビタンビタンと床に打ち  
付ける美少女戦士。

精液と腸液の混じったすえた臭いがモワツと周囲に振りまかれる。必殺技とは名ばかり  
の変態芸に、視聴している人々は言葉を失った。

ベチ♥ ベチン♥ ビタンッビタンッ♥ ベチ、ベチベチベチ♥

「えいつ♥ えいつ♥ シエルあんたに地球は渡さないわ！ ザーメンウィップで倒しち  
やうんだから♥ おっ♥ ほおううう……♥」

「フフ、確かにすごい技ね。臭くて鼻がおかしくなりそう♥」

「そ、そうでしょ！ みんな安心して。どんな怪人が来たってこれで一撃よ♥ おっ♥  
あひ♥ んおおおおお♥ お……お尻に響くう♥」

頭のおかしいセリフを吐きながら、アルカナサニーはカクカクとガニ股でダンスを踊る。  
白濁の塊は尻や太腿に当たり、ペチペチとみつともない音を立てた。

時折甘い声を出しているのは、まだ直腸に残った便が擦れているからだ。快楽器官と化  
した尻穴が発情し、セックス以上の淫悦が股間を襲う。

人々に痴態を晒している屈辱も、より強くマゾヒズムを活性化させる。

「そしてこれがザーメンウィップの進化系！　くらいなさい！　フレア・ザーメンウンコハリケーン！　んお、ほおおおおおおおおおっつっ♥♥♥」

白目を剥きそうなほど上目遣いになり、アルカナサニーはさらなる痴態を演じる。ヒップを時計回りに動かし、扇風機のようにザーメン便を回転させていく。

いつも明るくどんな状況でもあきらめないアルカナの戦士とは思えない行動。プライドを投げ捨てて、恥辱を加速させていく。

ブウン♥　ブウンブウン♥　ブウンブウンブウンブウン♥

「ほおおおおおおおっつ♥　この風でどんな敵も吹き飛ばしてあげるわ♥　くっさい臭いの前にひれ伏しなさいよね♥　んう、ふうふうふううっつ！♥　ケツ穴感じるううううううっつ♥♥」

「へえ、すごい技ね。人間として終わってるところが特に♥」

「ザーメンウンコハリケーンがすごすぎてそんな皮肉しか言えないようね♥　んう♥　おおう♥　お腹の中がジンジンするのとおおおおおおっつ♥　直腸にゴリゴリつてくる♥　ずっとウンコしてるみたいで軽イキが止まらないの♥　ほお♥　もおお　もおお　んほ　おおおおおおおっつ♥♥♥」



グルグルとザーメン便を回し、馬面で快楽に溺れる正義の変身ヒロイン。人間終了の変態行為に及んでいるのに、全身が発情してしまう。

Gカップの乳首はビン勃ちし、膣穴からは愛液が泉のごとく溢れ出る。フタナリ肉竿は痛いほどに勃起し、先端から先走りをこぼした。

「あう♡ んううう♡ ケツ回しオナニー気持ちいい♡ 最低なことしてるのに感じちやうううううう♡ これヤバイ♡ みんなにザーメンウンコ見せるのクセになるかも♡ トイレより臭い女の子になっちゃうよ♡」

甘い声を漏らし変態的な快楽に溺れる。羞恥心が最高にエクスタシーを引き上げ、肉竿に極太の血管が幾筋も浮かび上がる。

「糞穴がゴリゴリ擦れるのがいいの♡ 変態扇風機ごっこでおチンポ硬くなる♡ 気持ち良すぎて狂っちゃう♡ へお♡ んおおおおおおつ♡」

間抜け面でザーメン芸を楽しむ美少女戦士。ケイオスたちがカメラを回す様子が視聴者を意識させ、さらに快感を燃え上がらせる。

睪丸が熱くなり、射精衝動がこみ上げてくる。アヌスだけでは物足りず、フタナリオナニーがしたくてたまらない。

「我慢できない♡ しやせえしたい♡ お願いおチンポ擦らせてえええええええ♡ ザ

ーメン吐き出させてくださいいい♡」

「謝罪中なのにどうしようもない変態ね。でもいいわ。許可してあげる♡」

「あ、ありがとう♡ これでおチンチンシコれる♡ ザーメンウンコオナニー最高♡  
新必殺技最高♡ はひ♡ へひ♡ んっへおおおおおおおおッ♡ 全力でシコシコ  
する♡ ほご♡ おへえ♡ わたしのマゾ肛門がゾクゾクしちゃうの♡ おほっ♡  
きつくううううううう♡」

アルカナサニーはガニ股姿勢のままフタナリチンポに手を伸ばすと、ガッチリと肉幹を握り、ゴシゴシと扱き始めた。

待ちぼうけを食っていた海綿体に血液がポンプされ、欲情が一気に沸点を迎える。包茎の皮が捲れ、ピンク色の亀頭が顔を覗かせた。

理性の鎖が千切れ飛び、猿のように扱う手を止めることができない。

「ほお♡ んおおおおお♡ おチンポにギュンギュンくる♡ マゾオナニー止まらないよおおおおお♡ おんっ♡ おおん♡」

甘い痺れが全身の神経を伝わる。肉竿を扱う手の動きは速さを増し、頭の中が真っ白に漂白されていく。

アイドル顔負けの容貌は、浅ましい雌に堕ちて蕩けていた。

「ザーメン昇ってくる♡ わたしのドスケベおチンポが悦んじやってるの♡ ほご♡ ズん

龟头に擦れる皮とカウパー腺液が、グチュグチュと淫らかな音を鳴らす。快樂の波動が脳に回り、唇からせつない吐息がこぼれる。

精巢のオタマジャクシ一匹一匹の蠢きが感じられるようで、紅潮した金玉袋がゆさゆさと揺れる。

もうだらしなくザーメン吐き出すことしか考えられない。

「ウンコ穴もおチンポも感じまくりでバカににやる♥ ザーメンウンコブンブンしながらシコるの大好きい♥へお♥ あふうううくくん♥ くるくるくる♥ イカ臭い雄汁昇つてきてるうううううつつ!♥」

『この変態！俺たちを騙してたのか！』

『それで謝罪のつもりか！ 恥を知れ！』

「脱糞の途中でオナニーするなんて最低なのに感じるう♡ ザーメン昇ってきて頭おかしくなるのお♡ ほっ♡ もほオオっ♡ 浣腸すごすぎ♡ ケイオスのザーメンウンコの感触直腸が覚えちゃうよお♡ あひううううううう♡♡」

ザーメン便で芸をしながら、アルカナサニーはフタナリ快樂に溺れていく。恥辱をスパ





「イク♥ イグイグイグ♥ お尻もおチンポもどっちもイッちゃううううううう  
♥ おほ♥ んほ♥ ザーメンウンコ気持ちいい♥ 変態オナニー芸でマジイキしちゃう  
♥ 恥ずかしいのに配信中なのにおチンポ汁止まらない♥ みんなごめんね♥ アルカナ  
サニーは最低のチンポマゾで〜す♥ くっさいザーメンブリブリしながらケツアクメする  
ド変態♥ 人間終了の雌豚なんだ♥ んん♥ はうううう♥ またイグッ♥ ウンコ穴擦  
れるのぎもぢいイイ〜〜〜つつ♥♥」

勢い良く床にザーメンをぶちまけ、アクメする美少女戦士。理性まで排泄するような感  
覚を味わい忘我する。

肛門からまだ残っていたザーメン便がひり出され、ムリムリと菊皺を広げた。射精の衝  
撃で尻尾のような白濁棒が、重なりながらひり出される。

「あひ♥ あひ♥ あへええええ……♥」

「あら壊れちゃった？ 残念だけど今日の配信はここまでね。画面の向こうの人間たち、  
次はもっと面白いものを見せてあげるわ。楽しみに待ってなさい♥」

シエルが締めくくり、唐突に謝罪配信は終了した。残された視聴者は怒りで叫び声を上  
げる者、茫然<sup>ぼうぜん</sup>と配信終了画面を見つめる者など様々だ。

この醜態はSNSを通して世界中に拡散されるだろう。

「そうだ、約束は守らないとね。ちゃんとママは元に戻してあげるわ。良かったわねアルカナサニー♥」

「チンポお♥ ザーメンウンコお♥ アへ、あへへへ……♥」

アへ顔でうわ言を繰り返すアルカナサニーを一瞥<sup>いちべつ</sup>し、シエルはアルカナムーンのライズジェムを浄化する。

後片付けが終わりケイオスたちが退出しても、ザーメン便の吐き気を催す臭いは、いつまでも残っていた。



## 最終話 永遠の快樂と堕ちた正義

非常事態を告げる赤色灯が点灯し、アビスゲート日本侵略支部にアラートが響き渡った。原因は現在進行形で要塞内部を逃走中のアルカナデュオだ。

「あれだけの調教を受けてどうしてまだ動けるケオ!？」

「あいつらこそ化け物ケオ！」

ケイオスたちが働き蟻のように、入り組んだ通路を走り回っている。アルカナデュオは通路に面した倉庫と思われる一室で、エネルギーを回復していた。

「これで最低限戦うことはできるはずよ」

「ありがとうムーン。でもよくあんな作戦思いついたわね」

「伊<sup>だ</sup>達にあなたが生まれる前から戦ってないわ。そう簡単には堕ちないわよ」

アルカナムーンは快樂に堕ちたフリをして、ライズジェムを浄化しようとしたシエルから、逆に正のエネルギーを吸収したのだ。

完全に復活したアルカナムーンはアルカナサニーを抱きかかえ、調教部屋から脱出。捜索するケイオスたちをやり過ぎし、光の能力でアルカナサニーのライズジェムを回復させたのである。

「えっと、これからどうやって脱出しよつか？ 見た感じどこもケイオスだらけだし難しそうだよね」

「そ、そうね。私のシャイン・ドールで分身を出すわ。それに気をとられている内に脱出しましょう。それがいいと思うわ」

フタナリ調教を思い出し、どこかぎこちなくなってしまう母娘ヒロイン。お互いのチンポをぶつけ合った快感はまだ残っている。

あの時の感触を再び味わいたいと、淫らな欲望が股間の奥で疼く。

「その必要はないわ」

「——ッ!？」

作戦会議の途中で声が響く。今一番聞きたくなかったシエルの声だ。瞬間、母娘ヒロインの足元に空間の裂け目が現れ、二人は落下した。

「な、なんなのよここは」

「アビスナンバーズに与えられた能力の一つ、境界次元よ。ここを通って私たちは移動しているの。空間を無視して街へ怪人を送るのも、戦闘から離脱するのも思いのまま」

宇宙を思わせる境界次元に囚われたアルカナデュオ。戦闘態勢でシエルの動向を注視する。

「またなにか企んでいるんでしょ。これ以上エッチなことはさせないんだから！」

「何度も無様な姿は晒さないわ。く、蜘蛛が相手でもよ」

「ここで調教なんてしないわよ。貴女たちにはもつといい舞台があるもの」

シエルの手には中心部で保管されていた小箱があつた。小箱の表面にはいくつも眼球が浮かび、禍々しい<sup>まがまが</sup>気配を帯びている。

「なにそのキモい箱」

「これは深淵の小箱というの。私たちアビスナンバーズの目的はこの小箱を開いて入口を作り、各星に封印された太古の神を呼び出すこと。貴女たちは知らないでしょうけど地球も封印のある星の一つなの」

「そのために地球へ来たというの？ 大勢の人々を苦しめて私の仲間を殺した理由はそんなことなのかしら」

「神を呼び出した者と封印に選ばれた星は永遠の繁栄を授けられる。人類にとっても悪い話ではないと思うわ」

人類を踏みにじる侵略者ではなく、崇高な使命を託された殉教者のようにシエルは言う。「ふざけないで！ そんなわけわかんない奴に地球を任せられるわけないでしょ！ 今すぐ燃やしてあげるから覚悟しなさい！」



「難しかったのは小箱を開けるエネルギーね。何十年も前から調査部隊を送り込んでいたけど、電気や石油みたいな人間の使うエネルギーは役に立たなかったの。感情を超常のエネルギーに変換するライズジェムが鍵になると気づいたのは五年前だったかしら」

「アルカナの戦士を捕らえて調教していたのはそのためだったのね。フタナリ化させたのも計画の一環なのかしら」

「ええ。感情エネルギーを回収する最も効率の良い方法が精液だったの。本来備わっていない器官の方がより強い快樂の感情が集まるから」

告げられたアビスゲートの目的に、アルカナサニーは怒り、拳を構える。アルカナムーンは光の矢を周囲に展開しつつも、シエルの話に聞き入っていた。

「わざわざ説明してくれたってことは勝てる自信があるわけよね。望むところだわ。その箱ごとあんたの野望は打ち砕く！」

「同感ね。シエル、地球は渡さないわよ」

「いいセリフだけど残念ね。深淵の小箱は神を顕現させるための通り道。その力の一端を見せてあげるわ」

ザーメンで力を増した深淵の小箱から、無数の触手が出現する。アルカナデュオは触手をかわ躲そうと左右に跳ぶが、空中で静止してしまった。

まるで金縛りにあったように、身体を動かすことができない。

「う、動けない!？」

「私の能力で防御できないなんて。どうなっているの!？」

触手の先端に開いた眼球が二人の姿を捉えていた。まるで見たものを石化させるゴルゴーンのごとく、対象の自由を奪っている。

「これがこの星の神の力よ。殺すつもりはないから安心して身を委ねなさい。もうすぐ最後の扉が開くから。貴女たちには真の闇に染まった状態でフタナリ快楽を味わってもらうわ」

「なにを……言……」

「っ……シエルあなた……」

その言葉を最後に無数の触手が身体に巻き付き、アルカナデュオの意識が遠くなる。

「最後は守ろうとしていた人間たちの前で辱めてあげるわね。そして扉を開きなさい」

シエルは妖艶に微笑んで二人の頬を撫でる。人類の命運を懸けた終局のフタナリ調教が始まろうとしていた。



「おい、あれアルカナデュオじゃないか？」

「マジじゃん。でもなんか格好が変じゃね？」

「その後ろにいるのってあのシエルじゃねーか。なんで戦わないんだよ！」

「やっぱりあの配信ってフェイクじゃなかったんじゃ……」

神の触手で気を失ってから一時間後。

白昼の交差点に突如現れたアルカナデュオとシエルの姿に、ドライバーや通行人たちはザワザワとどよめきの声を上げる。

アビスゲートの怪人を何度も打ち倒してきたアルカナデュオ。その活躍を知らない国民はいない。

紅蓮のポニーテールとブロンドのウェーブロングヘアが風になびく。スタイル抜群のボディには、炎と光の能力が宿っている。

美少女戦士が戦闘態勢も取らず、侵略者というのとは考えられない光景だ。

（うう、みんなすつごく見てる。そうだよね……気にならないわけないよね）

（お願い……私たちを見ないで）

アルカナサニーとアルカナムーンは、不安げな表情で周囲の人々を見回す。彼女たちが



着ている衣装はいつものアイドルコスチュームではなく、シエルによって卑猥な改造を施されていた。

胸の部分はハート形に切り取られ、乳首にはペニスを模したピアスが付けられている。スカートの丈は股間を隠さない短さで、スパッツに開けた穴からは、勃起状態のフタナリチンポが露出している。

頭にはちょんまげのようにペニスの被り物を乗せられ、女性としての尊厳を徹底的に踏みにじられていた。

（こんな格好でみんなの前に出るなんて……恥ずかしいのに興奮しちゃう♥）

（ああ、もう消えてしまいたいのおチンポが硬くなってる♥ 射精したい♥ 無様にイキたい♥）

突き刺さるような視線と、引つ切り無しに鳴らされるクラクションが焦燥感と欲情を煽る。陰茎に刻まれた快楽によって、正義の心が闇に堕ちていく。

注目が十分集まったことを確認すると、シエルは口を開いた。

「注目しなさい人間たち。この場所を祭壇としアルカナデュオのフタナリ調教を行うわ。お前たちはギャラリィとして変態搾精を盛り上げ、神を悦ばせるのよ」

「はあっ!? なにわけのわからないこと言ってんだよ。さっさとブッ倒されちまえ!」

「あの二人がそんなことに付き合うわけねーだろ。冗談も大概にしろよ」

「うるせーぞ侵略者！ あんな配信で俺たちを惑わしたつもりかよ！」

割れるような罵声が周囲から飛ぶ。今日までアルカナデュオの活躍を目の当たりにしてきた市民たちにとって、シエルの言葉など妄言でしかない。

一度の配信で全員が失望したわけではなく、中には空き缶や石を投げる者まで現れる有様だ。

「くたばりやがれ！ この化け物——ガッ!!」

「へ？ う、嘘だろ？」

「い、イヤアアアアアアアアアアアアッ！」

「うるさいわよ下等生物。立場をわきまえなさい」

シエルが手をパーからグーの形に握ると、石を投げていた市民の頭がスイカのように破裂した。

すぐ隣にいた女性が悲鳴を上げ、辺りが騒然とする。

「うわあああああああつっ！ に、逃げろ……お、ゲボッ！」

「ギャラリーが逃げてどうするの。自分の役割もわからないほど愚かなのかしら」

「お願いもうやめて！ わたしたちはちゃんと従ってるでしょ！」

「みんなシエルの言う通りにして！　それが命を守る唯一の手段よ！」

逃げだそうとした男性の胴体に穴が開いたことで、ようやく周囲は静かになった。けたたましいクラクションの音も、ピタリと止んでいる。

人々はようやく気づいたのだ。画面越しではないリアルなアビスゲートの恐怖と、アルカナデュオが敗北したことに。

（悔しい。身体さえ自由ならこんなことさせないのに！）

（こんなところで儀式を行うつもりなのかしら。ダメ……亀頭が熱い♥）

触手眼球による束縛効果はまだ続いている。二人が市民を助けないのは、敵対行動をとろうとした瞬間に身体が硬直してしまうからだ。

シエルはフタナリ調教としか言わなかったが、真の目的は強い快楽の感情が混じったザーメンを搾り、深淵の小箱を完全に解放することだ。

人の多い街中に現れたことも、堕ちたアルカナムーンを元に戻したことも、より激しい羞恥に晒し、快楽の感情を増幅させるためである。

「始めましょうか。接続・小箱の触手群を解放」

「くっ、変なポーズさせないでよ！」

「っ……なんて数の触手なの」



シエルの命令で母娘ヒロインは両手を頭の後ろで組み、ガニ股でフタナリチンポを見せつける恥辱ポーズを取らされる。

深淵の小箱からは先端がペニスの形をした、無数の触手が出現した。

「貴女たちにはこの触手に奉仕してもらうわ。なんて言われることはわかっていてでしょうけど、この先端の形、どこかで見覚えがないかしら♥」

「え、これってもしかして……」

「ぐっ、なんてことを考えるの」

アルカナサニーは顔を引きつらせ、アルカナムーンは屈辱に唇を噛む。触手ペニスの形状、それは二人のフタナリチンポそのものだったのだ。

アルカナサニーのピンク亀頭に、アルカナムーンの包皮の捲れ具合が、そっくりそのまま再現されている。

お互いの勃起肉を鼻先に近づけられると、カアツと頬が熱くなった。

「変態！ そ、そんなことしても嬉しくなんてないんだから！」

「フフ、形だけじゃなくて味や匂いも完璧にコピーしてあげたわよ。母娘仲良くお互いのおチンポをペロペロしなさい♥」

「ううう……こんなの近づけられたらあ♥」

「こんな辱めに私たちは屈しないわ。ああ……もう先走りが漏れてるのね♥」

精一杯の虚勢もガニ股腋見せポーズのままでは滑稽なだけだ。触手群はウネウネと頭に群がり、コピーしたフタナリ肉竿を鼻先に近づけた。

本人そのままの乾いた先走りや、恥垢のすえた匂いが鼻孔を刺激する。

（初めて近くで見るけどママのおチンポってすっごい匂い♥ こんな匂いだからすぐビンビンになっちゃうんだけど♥ んっ、やつばあ……♥）

（ああ、美味しそうなんて思っちゃダメなのに♥ サニーの逞しい<sup>たくま</sup>デカマラしやぶりたくてたまらない♥ いけない……もう涎が溢れちゃいそう♥）

剥けた亀頭の光沢やキノコのように張り出したカリ首、根元にある金玉のプリプリした様子が欲情を誘う。

肉棒の虜にされた二人は瞳を輝かせ、薄く口紅の塗られた唇を開き、チュブリと亀頭を口に含んだ。

「じゅぷ……んっ、はぶ、ンンン……♥」

「ふぶ……ゾッシ あう、ううう……っつ！ ちゅぶ、ちゅぐふう……♥」

アルカナデュオはお互いのフル勃起したペニスを舐めしやぶる。恥垢のえぐみと、カウパー腺液のヌルついた感触が味<sup>み</sup>蕾<sup>ら</sup>を悦ばせる。

喉の奥には甘い痺れが走り、さらに味わおうと舌が動く。すぐそばでシエルに観察されているのだが、羞恥心よりも快楽を優先させてしまう。

「じゅぶ、んぶぶぶ……ふぐううう……つつ！　ちゅぼ、ちゅぼ、はぷううう……りゅろ、ふえろ、んうう……♡」

（ムーンのおチンポすつごく熱い。口の中火傷しちやいそう♡）

極太の血管を浮き上がらせ、マグマのような熱を持って脈動する肉竿を、アルカナサニ―は丹念に舐める。

欲情の昂りが幹を火照らせ、焼き立てのウインナーを口に含んだような感覚を覚える。鈴口から溢れる先走りが唾液と混ざり、少女の胸がトクンと鳴る。

「ちゅう……ンンッ……ちゅうう♡　じゅりゅう……ちゅぶぶうう……つつ！　じゅぞ……ンぶぶ……ちゅじゅ、じゅりゅ、はぷううウウ……ッッ！♡」

（サニ―のおチンポ美味しい♡　舌が止まらないの♡）

娘のチンポを喉奥まで咥え、鼻の下が伸びた馬面でフェラチオをする。母としてあるまじき下品顔だが、舌の動きは止められない。

キンタマ袋が唇に触れるほどに、雄幹を根元まで奉仕する。雌の本能が刺激され、淫裂がジツトリと湿り気を帯びた。



「いいわよその顔。もっと情熱的に触手への愛を込めて奉仕しなさい♥」

「ちゅぐつ、むぐウツ♥　じゅぼ、じゅぼ、ぞじゅじゅつ♥　美味しい♥　舌が止まらない♥　ふぶ……ジュボジュボ、じゅぼぼおお……つつ！　はぶ、ンンンッ！　んんっ♥　ふえろ♥　れろふえろお♥」

アルカナサニーはシエルに命令されるがままに、勢いよく頭を前後させる。口全体を使つて唾液をまぶし、ストロークのスピードを上げる。

下唇で金玉に触れ、上唇で挟み込む強烈な口淫。浮き出た血管を舌でなぞり、欲望で滾たぎつた熱を感じる。

フェラチオだけでもウイッてしまいそうだ。

「いいチンポしゃぶりよアルカナサニー。ママも負けてられないわよね♥」

「ひゃい♥　んぼ、ふぶうつ！　あぶ、ゾウツ、ちゅぼちよぼ……じゅっぽんっ！　ふウ……あつ、んんうううう……つつ！　おチンポしゅきい♥　んぷ♥　じゅろ♥　はぶん♥　ぐふうううう……ん♥」

口をすぼめ、強烈なバキュームフェラをする美熟女戦士。肉厚なリップでフタナリ勃起を挟み愛撫する。

亀頭のフルフルと震える感触が気持ち良く、ストロークが加速する。鼻の奥にツンとく

る恥垢の香りがたまらない。

口元はカウパー腺液でドロドロだが、チン舐め戦士に気にしている余裕はない。

「れる、レロレロレロレロ……ふえろ♡ ちゅふえろお……つつ♡ おヒンポ汁で口のに  
やか溢れちゃう♡」

「ぺろ、ぺろぺろふえろ♡ ちゅろ……はぶれろふおろお♡ 舌が止まらひゃい♡ は  
ぶ♡ んふううう……♡」

キャンディーを舌で転がすように、アルカナデュオはピンク色に剥けた亀頭を愛撫する。  
じゅわじゅわと溢れる先走りのトロミを味蕾で感じ、淫猥に口をすぼめる。

エラに残った恥垢を残らず舌でこそげ取り、磯臭い苦みにすら快楽を覚える変態母娘。  
顎が外れそうになりながらも、キノコ肉から口が離せない。

「嘘だ……アルカナデュオがこんな下品なフェラをするなんて！」

「マジでアビスゲートに負けちまったのかよ！ クソオツ！」

「あの配信通りじゃねえか！ 見損なったぞ！」

ギャラリーになることを強制された市民は、目を逸らすこともできず悪態をつく。信じ  
てきた正義のヒロインに裏切られ、絶望が広がっていく。

「ふえろ……ぺろお♡ ペろぺろ、ンふえろ♡ はぶ、んん♡ あふ……じゅりゅり

ゆう♡」

（みんなに軽蔑されてるのに感じちゃう♡ ママの包茎おチンポ蒸れ蒸れで素敵すぎるよ  
お♡）

口内に広がる甘酸っぱい衝動に、アルカナサニーは虜になってしまふ。アルカナムーンのペニスは包茎であるものの太く長く、エラの張り出しや勃起の持続力も一級品だ。

調教部屋で時折奉仕を強要されたケイオスのペニスとは、同じフェラチオでも充足感が違う。暴力的な雄の象徴に、心が惹かれてしまふ。

「うう……はぶっ、んんっ♡ ちゅぶ……んふううう♡ んふ♡ はふん♡ れろ、ふえろれろりゅろお♡」

（おチンポから口が離せない♡ チンカスの匂いもおツユのヌルヌルも全部好きなの♡ もうサニーのおチンポなしじゃ生きていけない♡）

まるで愛おしいものを見るように、蕩けた瞳でフェラチオを続ける美熟女ヒロイン。唾液とカウパー腺液でドロドロになった娘触手勃起は、さらに硬さを増していた。

海綿体が膨張した亀頭はパンパンに張り詰め、今か今かと射精の時を待ち望んでいる。自らのフタナリ肉竿も同様であることを悟り、アルカナムーンは欲情を昂らせる。

「ふえろ……ふえろ♡ レロレロ♡ れろお♡ んぷっ……クチュ、ちゅじゅうう……っ



っ！♡」

「んんっ、ふっ、じゅじゅうう♡ ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅりゅっじゅちゅ♡ はぶ、  
ンン……ングッ♡ ふあ、フンくウウうううう……っ！♡」

淫音を奏でむしゃぶりつくように舌を動かすフタナリ母娘。湿った唇を肉幹に擦りつけ、  
極上の快感を与える。

先走りはさらに滲み出し、胸の奥が熱く疼く。二人のフェラチオはストロークの速度を  
増し、脊髓は熱した鉄棒のように昂る。

「あむ♡ ふえろ♡ はふうううん♡ ちゅぶ♡ んううう……♡」

（すごいまだ硬くなるんだ♡ もし挿入されたらわたしどうなっちゃうんだろ♡）

「ふあえ、ふえりゅ、じゅちゅ♡ んぶっ、うっ、ふうう……♡」

（口もアソコも溶けそうなくらい気持ちいい♡ もっともっと深く繋がりたいの♡ ああ、  
娘のおチンポでこんなことを考えてしまうなんて♡）

ハチミツのように甘い吐息を吐きながら、アルカナデュオは雄と雌の悦びを味わう。普  
通ならあり得ない、女性同士で互いのチンポに奉仕する倒錯的快樂。

ノーマルなセックスでは味わえない淫樂に、挿入されずとも絶頂を予感する。嫌悪感を  
示す心とは裏腹に、子宮にもアクメが欲しくてたまらない。

「おチンポしゃぶりはもうお手の物ね。でもそろそろ触手じゃ我慢できなくなってきたんじゃない？ 次は直接お尻の穴を舐め合ってもらおうかしら♥ 69のポーズで犬みたいね♥」

「い、嫌だと言っても無理なんでしょ。仕方がないわね♥」

「逆らって周囲の人々を傷つけるわけにはいかないわ。やりましょうサニー♥」

最早反抗することもなく、シエルの言いなりになってしまふ美少女戦士。肉竿から唇を離すと、アルカナサニーが上、アルカナムーンが下になって密着し、お互いの尻穴に口を近づける。

アルカナサニーのアヌスは鮮やかなピンク色で、キュツと菊皺がすぼまっている。アルカナムーンのアヌスは少し色素が沈着した紅色で、菊皺の周りには黒々とした陰毛が生えていた。

「へ、へー、ムーンってこんな感じなんだ」

「真面目な顔をしておいて下の処理は甘いよね。肛門にいやらしいケツ毛が生えてるわよ♥」

「ああ、言わないで♥ サニーもあまりジロジロ見ないでえ♥」

陰毛が人よりも毛深いことは、アルカナムーンの密かなコンプレックスだ。コスチュー

ムを着るたびに、処理が甘くないか入念にチェックしなければならない。

誰にも話したことの無い秘密を娘と仇敵きゆうてきの前で暴露され、羞恥の炎が燃え上がる。

「いつまでじっとお尻の穴を見ているの。早く始めなさい」

「そ、そうよね♡ んっ、うう……♡ れろ、ふえろお♡ んっ！ ンンッ！♡」

「ひゃひんっ！♡ ほお♡ きたきたきたあああああああつ♡」

アルカナデュオはアヌスに舌を伸ばし、ペロペロと舐め始めた。蒸れた雌の香りが鼻孔を刺激し、陰毛が鼻先に触れる。

敏感な部分を刺激されると、早くも声が跳ね上がってしまう。

「ぺろ……りゅろ……あふ、んううう……♡ はう、あひいいいいいん♡ お尻の穴氣持ちいいいいい……♡」

「おほおおおおお♡ ケツ舐めキクう♡ はぶ、ちゅっ♡ じゅりゅ、れりゅりゅりゅ♡ ああ、私のドエロケツ穴が喜んじやつてるうううううううう♡」

媚びきった笑顔でアルカナデュオはアヌスを舐めしやぶる。滑らかな菊皺の感触と、陰毛のゾリゾリした感触が、互いの舌先を悦ばせる。

肛門奉仕の快樂で、フタナリ肉竿も嬉しそうに跳ねた。

「んちゅ、ふえろ……はぶう♡ んっ、れろお♡ 穴の周りグリグリするのだめえ♡ ん





戦士なんて名乗ってるのに♡ アナルはとつてもお下劣なのよおおおお♡へひ  
♡ おひイイイイイイイ~~~~ン♡」

「ぺろ、りゅろおお♡　ちゅぶ♡　んちゅう♡　でも臭くてキツツいのもしゅき♡　目が痛くなるくらいのマゾ臭でおチンポもバキバキになつちやう♡　ゲロ吐きそうな臭いで勃起昂るうううううはぶ♡　ちゅ♡　ちゅうう♡」

自らをどこまでも貶め、二人は肢体をくねらせる。恥辱でさらに汗が噴き出し、腋窩や股間の臭気を強くした。

ムワツと湯気のような淫臭が発散され、やや距離を取っていたシエルも顔をしかめた。

「とんでもなく下品なケツマゾ母娘ね。スケベな顔♥ おチンポも十分大きくなつたみたいだし、フェラチオも許可してあげるわ。おチンポのイキっぷりをお互いによく見ておきなさい♥」

「げ、下品にやんて言わりやいで……！ スケベな顔なんふえ……ふぐ♡ あふうううう  
う♡ ふえろ♡ ぐぽ♡ ぐっぽ♡ じゅぽ♡ してるわけないでひよっ！♡」

「あらさつそく？ そんな音鳴らしても説得力ないわよ♥」

「じゅぶ♡　　じゅぶ♡　　はぶ♡　　ンじゅるるるる♡　　侵略者ごときひや偉そうにい……」

♡  
ちゅう♡  
ずちゅううううううううううう♡  
おチンポたまりやないいいいい♡

シエルが言い終わる前に悦んでフタナリ勃起へ吸い付く変態戦士。頭の中は快楽で支配され、戦士の矜持など欠片もない。

頬をへこませ、雄の象徴を口全体を使って舐めしゃぶる。亀頭の弾力やビクビクと蠢く裏筋の反応が嬉しく、舌を激しく回転させてしまう。

さらに周囲の触手ペニスが金玉の下からもゴシゴシと愛撫を始め、ほどよい刺激から無意識の内に腰を前後させてしまう。

フタナリチンポの鈴口がわななき、アルカナデュオは絶頂へと突き進む。

「んおおおおおおおおお♡ はぶ♡ じゅぶぶぶ♡ 直おひんポきくうううううう♡ 触手もいいけど本物はもっひよチンカス臭くて股間に響くよおお♡ あふ♡ んそぶ、ちゅぶぶぶん♡」

「サニーのおひんポたまりやない♡ 若くてギンギンで舐めごたえがあるのお♡ ひえろ♡ んちゅぶ♡ ちゅ♡ ちゅりゅうううううっ！♡」

69で喉奥までフタナリチンポを咥え込む母娘ヒロイン。肌を重ねることにより強い快美が感じられ、舌のスピードが加速する。

放置プレイをされていた肉竿への口淫奉仕で、急速に射精欲求が高まっていく。一週間オナ禁をしていたように、亀頭の耐久力はもう限界だ。



「も、もう無理！ 射精<sup>で</sup>る！ でちやううううううつつ！♥」

「私も限界なの♥ イク♥ くるウウウウウウううううつつ！♥」

亀頭が芋虫のように蠢動し、二振りの男根はザーメンを吐き出そうとする。アルカナサニは瞳孔を開いて動揺し、アルカナムーンは歡喜に頬を緩ませる。

二人の感じる様に合わせるように触手フタナリも震え、ザーメンの発射態勢に入る。頭の中が真っ白になった瞬間、股間と触手、複数の方向から欲情の決壊が訪れた。

どびゅっ♥ ビュググッ♥ どびゅうううううつつ♥ ビュグッ♥ どぶぶぶ

ぶううつつ♥ ドビュ、どつぶびゆるるううううううつつ♥

「ふぐ、んんんんんんつつ♥ むぐっ♥ んぶううううううううううつつ！♥」

（ザーメン♥ ザーメンでた♥ ムーンの臭くて熱くてドロドロなのが口いっぱいに出てる♥ んう……すつごく濃い♥ たまんない♥）

「ふぐっ!? むうっ!? ふぶう……ううううううううつつ!? ふぐ♥ ンン♥ ンンンンンううううううううつつ♥」

（イク♥ イッチやう♥ サニーごめんなさい♥ 恥ずかしいママでごめんなさい♥ おチンポ舐めながらお射精しちやうううううううううう♥）

半固形状の濃厚なザーメンを注がれ、アルカナデユオは恍惚<sup>まうごつ</sup>とした表情を浮かべる。男

性のものとはレベルの違う雄汁の迫力に、身も心も蕩けていく。

そして射精の勢いに吞まれるように、二人の身体がビクビクと痙攣する。エクスタシーが脊髄を電流のごとく奔り、雌として極上の快感を味わう。

（うう……ママ出しすぎ♥ 口から溢れちゃいそう♥）

（若いザーメンたまらないわ♥ 精子が舌の上で泳いでいるみたい♥）

「一滴もこぼしてはダメよ。全部飲みなさい♥」

「んぐううっ！♥ ゴク♥ ング♥ ゴツクン♥ んく、うううううん♥」

「じゅる……んぐくん♥ ゴク♥ ゴクゴクゴクッ♥ ズッ♥ ズッ♥」

シエルの命令通りに二人はザーメンを嚥下する。イカ臭い匂いと不快なトロミも、今は甘露のように感じられた。

パック牛乳をストローで吸うように、鈴口から最後の一滴まで白濁を搾り取る。貞淑だった美少女戦士は、浅ましい雌に堕ち蕩けきっていた。

（ザーメンの量は問題ないけどまだ感情エネルギーが足りないわね。もっと強い快楽が必要かしら）

シエルは飲み込んだザーメンを深淵の小箱に吸収させ、次の手に頭を巡らす。小箱の気配はさらに強さを増し、地球の深部で胎動が始まる。



「二人とも今の射精で本当に満足しているのかしら？　せつかくお互いのチンポがあるのよ。もっと極上の快楽を味わえるわ」

「んんんう♥　なに言ってるわけ。い、意味わかんないんだけど」

「また辱めるつもりね。やるなら早くしなさい♥」

素っ気ない態度を取るアルカナデュオだが、心の奥ではシエルの思惑に気づいていた。フェラチオだけでも、脳が蕩けるほどの気持ち良さを味わうことができた。

ならオマンコに直接挿入すれば、セックスならばどれほどの絶頂を味わえるのだろうか。無意識の内にゴクリと生唾を飲み込んでしまう。

「いいのよここでセックスしても。男と寝ても手に入らない快楽を楽しみたいでしょう？　先にお願ひした方から挿入させてあげるわ♥」

（ダメダメ！　いくら射精したいからってママとセックスなんて。で、でもセックスってオナホよりも気持ちいいのよね……うう、我慢しないと♥）

（母親が娘を犯すなんて……でもおチンポがまだガチガチなのよお♥　もっとイキたい♥　あの人みたいに射精したい♥）

ギリギリのところで理性を保つアルカナサニーと、亡き夫との情事を思い出して興奮してしまうアルカナムーン。



フタナリ化させられた肉体は雄の欲望を際限なく昂らせ、決断の時が訪れた。

「ごめんなさいサニー。私もう我慢できないの♡」

「む、ムーン!？」

「シエル、サニーのオマンコにおチンポをぶち込ませて♡　ぐちゃぐちゃに犯させてええええええええええっつ！♡」

欲情の限界を迎えたアルカナムーンは、生挿入をシエルに懇願してしまう。触手が蠢くとアルカナサニーを縛り上げ、M字開脚のポーズを取らせた。

恥部が露わになり、薄ピンク色の花卉が開いている様が見える。その光景に射精欲求が最高に高まり、フタナリチンポがはち切れんばかりに膨張する。

「フフ、本当にいいのね？　後悔しても知らないわよ♡」

「だ、だってもうセックスのことしか考えられないのよ♡　ああ、イキたい♡　イキたい♡

金玉熱くなるうううううう♡」

「そんなのダメだって！　みんなも見てるしわたしたち親子なんだよ!？」

「そんなことどうでもいいわ♡　おチンポ射精より大切なものなんてあるわけないじゃない♡　ああ……なんて美味しそうなオマンコなの♡」

「ま、待って！　もう少し話し合ってから……ア、あ、あぐっ!?　いや……ひっ、ヒグウ



っ！♥ オマンコ肉がキュウキュウ吸い付いてくるの♥ はひ♥ ふんぐウウウウウウウウツツ♥」

「つくううううつつ！ い、いきなり激しすぎ……あぐつ！ ううううううううううううつつ！」

「だって初めての生ハメセックスなんだもの♥ 腰フリ止まらないイイイイイイイイイイイイイイイイイーッッ！♥」

アルカナムーンは獣のような性欲を滾らせ、膣穴が壊れるほどの勢いで腰を前後させる。電マやオナホール相手とは違う生の快感。

相手のことを気遣う余裕などまったくなく、ただ絶頂に向かってひた走る。フタナリ肉幹はかつてないほどに硬くなり、包皮から解放されたエラが突っ張る。

亀頭は蜂に刺されたように膨れ上がり、愛液と鮮血でヌラヌラと光っていた。

「フンツ♥ フンツ♥ フンウウウツ♥ おチンポ熱くなる♥ ギンギンになってザーメン昇ってくるのおおおおおお♥ んお、おおおおおつつ！♥」

「はぐ、ううう……アソコ……キツいい……壊れちゃう……」

「んふ♥ もっとオマンコが締まるなんて最高ね♥ キツマンなんてさすが私の娘だわ♥ はう、へっふううううううつつ！♥」



M字に開いた太腿に手を回し、腰を突き上げて膣穴の奥部を穿つ<sup>うが</sup>。ザラザラした肉ヒダの感触が心地よく、一突きごとにアルカナサニーよりもせつない声を漏らす。

テクニクもなにもない直線的な挿入だが、二人の快楽は加速度的に高まり続け、鈴口と子宮口が歓喜にわななく。

「おチンポが熱くておかしくなりそう♥ もうイキたい♥ ザーメン出したい♥ あぐ、んっぐうううううつつ♥」

「だ、ダメだつて！ 中に出して赤ちゃんできちゃったらどうするの!？」

「でもコンドームなんて用意してないもの♥ これも訓練だと思つて我慢して♥ 私のポコチンのために耐えなさい♥ へお♥ ンオオオオオオ……♥」

「いや……イヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

娘が自分の子を妊娠する可能性も、今のアルカナムーンには些細なことだ。ヘコヘコと腰を振り、子宮口を亀頭でノックする。

アビスゲート相手に見せる苛烈な闘争心を性欲に変換し、常人なら壊れてしまうほどのスピードで快楽を貪る。

「イク♥ きちやう♥ おチンポイクう♥ あひ♥ ひiiiiiiiiいん♥」

肉竿が限界を迎え、美熟女戦士は一際せつない声を上げた。淫欲が下半身に回り、ピス



呼吸も激しく乱れ、ハッハッと犬のように息を吐く。

「あひ♥ おひいい……♥」

「ひどいよママ……ひつく、ううう……」

処女を失い中出しされたアルカナサニーは、幼女のように泣きじゃくる。だが、その一方でフタナリ肉竿はかつてないほど勃起し、先走りで水溜まりを作っていた。

「娘にあれだけ射精するなんて素敵なママね♥ それじゃ次は貴女の番よ。アルカナサニー」

「わ……わたし？」

「犯されて終わりじゃ不公平でしょう？ 貴女も犯す側に回っていいのよ♥」

「わたしがママを……」

母親に陵辱されたアルカナサニーにとって、シエルの言葉は至極当然のように思えた。あの痛みと快楽を自分も楽しむ側になりたい。

膣穴から溢れ出る生暖かい精液の感触が、少女の獣欲を覚醒させる。肉棒で相手を服従させることに、期待感と支配欲が激しく昂る。

一度そう思うと、もう歯止めは利かない。

「ママ……今度はこっちの番だからね。ゴリッゴリに犯してあげる♥」



触手が蠢き今度はアルカナムーンを後背位で拘束する。アルカナサニーは双臀に手を当て、フタナリ勃起を割れ目に押し当てた。

熟れた膣穴はラフレシアのように開き、麝香じゃこうのような香りがした。十分に濡れた淫裂を亀頭が押し広げていく。

ズグ♥ ずじゅぶぶ♥ ぐりゅ♥ ずちゅちゅちゅううううっっ！♥

「おほっ♥ これヤバあ♥」

「ああっ♥ きたあ♥ サニーのおチンポ入ってきたああああああ♥ オマンコの中ズリズリって進んでるのおおおおおお♥」

裏切られすべてが限界に達したアルカナサニーは、杭を打つように腰を打ちつけ、母のオマンコに挿入する。

よく熟した柔らかな膣肉を、若いフタナリ勃起が擦り上げる。今まで女を知らなかった肉棒は悦びに震え、炎のごとく熱を帯びていた。

「ああうううううう♥ オマンコすごい♥ あったかくてムニムニユでくっついてくるよ♥ まだ入れたばっかなのにもうイッチャいそう♥ ひゃう♥ あふぐうううううっっ♥」

初々しい肉幹が最大に硬さを増し、アルカナサニーは腰を振る。母が夢中になるのもわ

かる快楽の肉抱擁。

自分のすべてが下半身に集中し、融解するような感覚に包まれる。勝気な美少女戦士は、その容貌を淫らに染め、生セックスの淫悦に溺れる。

ズチュ♥ ジュグン♥ ぶぷ……パン♥ パンパンパン♥

「へうううううううううつつ♥ おチンポにビリビリくるうううううううう♥ セックスしゅき♥ しゅきいい♥」

「ああつ、そこつ、そこよ♥ もっと奥まで突いて♥」

「うん♥ ママのオマンコわたしのおチンポで征服しちゃうんだから♥ パパなんて忘れちゃうくらい犯してあげるわね♥ ふん♥ ふううん♥ ほお♥ もっほおほおおおおおおおつ♥」

グツグツと滾る欲情を精管に押しとどめ、アルカナサニーは最高速でピストンする。一秒ごとに快楽の波が大きくなり、陰囊に悦楽の波紋が広がる。

乗り越えても乗り越えても次の快美が訪れ、フタナリ性欲が治まらない。ピンク色の龟头は、薄紅色に染まり燃えるような熱を持つ。

「おん♥ おん♥ ほおおおおおん♥ 腰振り止まんない♥ ムニユムニユってオマンコ肉が吸い付いてくるんだけど♥ ママの雌穴最高♥ 勃起マラ昂るうううううううう

うう♥」

獣のようにピストンを繰り返し、快楽を貪る美少女戦士。生の媚肉の感触に脳髓が甘く蕩ける。

母親を犯しているという背徳感に、ビキビキと肉幹が硬さを増す。シエルの計画に利用されていることも、今は考えられない。

「あうっ♥ んおう♥ ねえムーン、パパのとわたしのおチンポどっちが気持ちいいか答えてくれない?♥ パパにもそんなスケベな声聞かせてたのか気になっちゃって♥」

「そ、それはあ♥ はう、んううううううううううっ!♥」

「答えないとオマンコ気持ち良くしてあげないよ♥」

「んううううううっ!♥ ピストン止めないでええええええええ♥ 言う!♥ 今言うから!♥」

初めて責める立場になったことで、アルカナサニ一の嗜虐心しぎやくが暴走する。フタナリチンポの強さを目の前の雌に教えたくてたまらない。

わざと腰を振るスピードを落とし、アルカナムーンを生殺しにする。自らが望んだ答えを聞くために。

「サニィのおチンポの方が気持ちいいわ♥ あの人の短小ヘニヤチンより太くて逞しいお



チンポがいいの♡ 私のオマンコを奥までゴンゴン犯してええええええええええ♡」

「えへへ、やっぱりそうだよね♡ ママみたいな淫乱マゾはおチンポの大きさしか興味ないもんね♡ パパじゃできないくらいオマンコ拡張してあげる♡ フンッ♡ フンフンフンッ♡」

「んひひひひひひひひひひひひひひひひッ♡ おチンポで串刺しにされてるの♡ お腹がボコッって膨らんじやうううううう♡」

子宮口をノックされ、アルカナムーンはアへ顔で喘ぎ声を上げる。一匹の雌として娘に屈服させられる淫悦に、涙と鼻水が止まらない。

アルカナサニーもさらに締まる膣穴に機嫌を良くし、カリ首で雌壁を擦り上げた。フタナリ陰茎にはグロテスクな血管が浮かび、亀頭が赤熱する。

金玉では精子が蠢き、解放の時はすぐそこまで迫っていた。

「あぐ、んんああああ♡ ほお♡ ンンンううううううっ！♡」

（セックス気持ち良すぎなんだけど♡ アルカナの戦士とかアビスゲートとかもうどうでもいい♡ おチンポさえあればなんにもいらぬ♡ イキたい♡ ママのオマンコに種付けしたい♡）

理性がハチミツのように蕩け、アルカナサニーは肉悦を貪る。触手が周囲に集まり、シ

エルが計画を進めようとしていることはわかるが、それに抗う術がない。

正義の美少女戦士としての矜持よりも、フタナリ肉竿の快樂がすべてを支配する。鈴口が開き欲情が昇ってくる。

「おっ♥ もっ♥ おチンポくる♥ もう射精きちやうかも♥ あひ♥ んっふううううううう♥ イクイクイクイクうううう~~~~っっ!♥」

初めて生挿入を味わった肉棒が長時間の快樂に耐えられるはずもなく、射精耐久力が一気に限界を迎える。

フタナリ勃起は熱く疼き、ドチュドチュと淫らな水音を立ててピストンが加速する。アルカナムーンのオマンコがキツく締まり、複雑にヒダが浮き出た膣壁ちつへきの感触に、雄の本能が限界を迎える。

確実に妊娠させるという勢いで、フタナリザーメンが迸ほとばしった。

どびゅ♥ ビゅば♥ どびゅぶぶうううううううっ♥ ビュ、ビュググ♥ どぶ、

どぶ♥ ビュッビュッルルルウウウウウウウウウウッ♥

「ンオオオオオオ♥ 種付け♥ ママのオマンコに種付けする♥ おチンポ汁ぶりぶ

り注ぐ♥ 金玉が空っぽになるまで射精する♥ 初セックスでコキしまくりゆうううう

うう♥ んお♥ おおおおお♥ 中出し最高♥ 猿みたいに腰振り止まんない♥ ヘコ







へこしすぎてチンポコ燃えるうううううううう　♥　アヒ　♥　へっほおおおおお  
 おおつつ　♥　♥　孕め孕め娘の赤ちゃん孕んじやええええええええ　♥　♥　んっほおおお  
 おおおおおお　♥　♥　」

過去の射精を凌駕する勢いで、アルカナサニーはザーメンを解き放つ。膣穴を白濁液が荒れ狂い、溢れた液体は竿の根元から滲み出た。

周りの触手からもザーメンが噴き出し、母娘の身体を白く染めていく。アルカナデュオの矜持もなにもかもが、フタナリ快楽に押しつぶされる。

「あひ♡ おひい♡ セックスすぐすぎるんだけど♡」

「んううううううううううう♡  
久しぶりの中出したまらにやいい♡  
サニーのおチンポ素敵すぎりゅのお♡」

「親子であんなイキ顔しやがつて。失望したぞ！」

「お前たちなんか信じた俺たちがバカだったよ！」

アへ顔でまだピストンをやめない変態母娘ヒロイン。ギャラリーの罵倒も耳に入らず絶頂の余韻に浸る。

「チンポ♡ チンポ♡ チンポ大しゅき♡ ふえろ♡ ちゅうううん♡」

「地球の平和よりおチンポなのお♡ あへ♡ んちゅ♡ あへええええ……♡」

感謝を示すように触手ペニスへ奉仕する。あれだけ出したのにフタナリ勃起はまだ治まらず、次の快楽を求めて尿道を震わせた。

「フッフ、最高のショーだったわよ。変態ヒロインさん♥」

堕ちたアルカナデュオの周囲に触手が取り囲み、精液を吸収していく。ヘカトンケイルなど足元にも及ばない感情エネルギーがシエルを中心に集束する。

「これでエネルギーが最大まで充填されたわ。人間たちよく見ておきなさい。この星の神が降臨する様をね」

深淵の小箱から暗黒の閃光が幾筋も迸る。大地の震えを感じながら、シエル・エル・ロータスは微笑んだ。

## エピソード 終わる世界のフタナリ快樂

深淵の小箱が開いてから三年後。

呼び覚まされた神は恩恵をもたらすというシエルの思惑とはまったく違う存在だった。神が求めたのは際限ない血と快樂。

地球の人口の半分が消失すると同時に、アビスゲートの各侵略支部も壊滅。アビスゲート本部は地球侵略をあきらめ、現地の幹部を見捨てて別次元に撤退した。

そして、アルカナデュオが守っていた街では、三体の石像が広場で市民たちから侮蔑の視線を投げかけられていた。

「こいつらってアルカナの戦士とアビスゲートの幹部だったんだろ？　なんでこんなことになってんだよ」

「ここが神が降臨した始まりの地だからな。封印を解いたご褒美として永遠の快樂をお与えになったんだろうさ」

「それでこの様かよ。やっぱ神ってえげつねえわ。まあ、そのおかげで俺たちはあの大虐殺から生き残れたんだけどよ」

「だな。こいつらがイッてる間は捧げるエネルギーに困らないってわけだ。まさに正義の





（もうイキたくないのに♡ ザーメン昇ってくるう♡ バイブ責めでおチンポフル勃起してるの♡ おっ、ンオオオオオオオオッ♡）

（おほ♡ チンポキツいいいいいい♡ ごめんなさい人間たち♡ 神の復活なんて企んだ私たちが悪かったわ♡ もう侵略なんてしないから元に戻してええええええええ♡）

食事や睡眠は不要で、排泄だけを許可された惨めな存在。彼女たちの排泄物は神への供物として、市民に集められ祭壇に捧げられている。

（あひ♡ く、くる♡ またきちゃうううう……♡）

（イグ♡ オマンコ越しに前立腺が責められてるのお♡ あう♡ んううう♡）

（フタナリ嫌あ♡ この私が原始的な振動程度に感じさせられるなんてえええ♡）

肉デイルドーが激しく振動し、イボから滲み出す媚薬は石化した肉竿や膣穴すら感じさせる。

自死を選ぶことさえできない三人に、今日十何度目かの絶頂が訪れた。

どびゅ♡ びゅぐぐう♡ ドバ、ビュババアアアアアアアアッ♡ どぼ、ドボ

ドボドボ♡ どびゅ♡ ぶびゅ♡ どびゅぐぐううううううう♡ ボビッ♡ ビュビ

ッ♡ ドッビュルルルルウウウウウウーッ♡♡



「ほおおおおおおおおおおおお♥ ザーメンでりゅううううううう♥ んお♥ ほおおお♥  
 頭バカになる♥ おチンポのことしか考えられないマゾ石像になるのお♥ 恥ずかしいの  
 にまたみんなに見られてるのにマジイキしちゃう♥ ずっとイッてるのに全然飽きないよ  
 お♥ おおお、イクイクイクイクグうううううううううう♥」  
 アルカナサニーのフタナリチンポから、乳白色のザーメンが噴き上がる。紅蓮のポニー  
 テールが印象的だった美少女戦士は、石になった肌をイカ臭い雄液で汚し、今日も市民た  
 ちの嘲笑を浴びる。

「イグ♥ イグ♥ イグイグイグイグううううう♥ んほ♥ おチンポぎもちいい♥ お  
 射精するの止められない♥ 永遠の四十三歳フタナリババアがくっさい精液ぶちまけるの  
 ♥ 一生アへ顔のスケベ石像で金玉の奥からザーメン搾り出す♥ アライズのみんな許し  
 てえ♥ 私は地球なんかよりポコチンアクメが好きな雌豚なの♥ ぶひ♥ ぶひ♥ 豚射  
 精気持ちいいぶひいいいいいいつつ♥♥」

アルカナムーンのフタナリチンポから、やや黄ばんだザーメンが飛び散った。ブロンド  
 のウェーブロングヘアをなびかせるベテラン戦士は、無様すぎるアへ顔絶頂を晒す。

伶俐な双眸は快楽に染まり、れいり理知の欠片もなくそうぼうアクメを続ける。

「あぐうううううううう♥ チンポイク♥ イッチやうううううう♥ いくつもの次元



を侵略してきた私がこんな未開惑星の猿の見世物になるなんて♥ うう、屈辱だけどチンポがイキり勃っちゃうわ♥ 馬みたいに太くて長いフタナリチンポでセルフ顔射してしまうのお♥ んっ♥ んおおおお♥ お願いだから誰か助けて♥ 永遠にチンポアクメ石像なんて嫌ああああああああっ♥♥」

元アビスナンバーズのシエルは、胸元まであるフタナリチンポからドロドロのザーメンを吐き出した。

ブルーのショートヘアで常に余裕の笑みを崩さない少女は、白目を剥きながら雄の快楽に翻弄される。

神の前では様々な能力も意味をなさず、すでに手下の怪人やケイオスたちは触手の養分になっていた。

「『おチンポイク♥ イキまくる♥ フタナリ最高なおおおおおお♥ おほ♥ おっほおおおおおおおおおおおおおおおっ♥♥』」

三人は同じ想いを胸に噴水のごとくザーメンを漏らす。白濁汁は神の住む赤い空へ目掛け、高く高く噴き上がっていった。



二次元ドリームノベルズ

# 光輝の アルカナデュオ

～変態絶頂に堕ちるフタナリ母娘～

著者 有機企画

装丁 マイクロハウス

発行 株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル 1F

編集部 TEL03-3551-6147 / FAX03-3551-6146

販売部 TEL03-3555-3431 / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。  
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。  
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Yuukikikaku 2022

<https://ktcom.jp/>

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど  
どしどしお書きください！ 読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。  
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ <https://ktcom.jp/goiken/>

◎手紙・ハガキの宛先◎

0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
(株)キルタイムコミュニケーション 二次元ドリームノベルズ感想係





Illustration by ねいさん

『光輝のアルカナデュオ ～変態絶頂に堕ちるフタナリ母娘～』  
©KILL TIME COMMUNICATION





# 淫紋つきで挑む淫らな体育祭で 勝利を掴むことはできるのか!?

スポーツ大好き女子校生の輝木ミコトは、友達以上恋人未満な関係の幼なじみ元喜一郎たちと毎日運動をしながら楽しく過ごしていた。そんなある日、スポーツを地球から奪うために現れた宇宙人、プリンス・アウターの精神支配によって、人類が無気力なスポーツ嫌い状態に陥ってしまう。唯一その支配におかれなかったミコトは変身ヒロイン、ビビッド・ガールに変身するが……。敗北したミコトを待っていたのは常識改変された淫らな体育祭! パイズリ玉入れ、挿入ムカデ競走、セックス全員リレー。身体に刻まれた淫紋の力はミコトの正義と淡い恋心を砕いてゆく……。

**木森山水道**

挿絵:suc



## 電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場!

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録! ボリュームたっぷりでお送りします。

女体化させられた元勇者は  
新たな魔王の孕み袋!?

**黒井鶴**

挿絵/umiHAL

**TS勇者クリス**

魔物ファックで  
隷属産卵



魔装を身に纏い、  
愛しき人の為に戦う少女に  
NTRの毒牙が襲い掛かる!

小説  
**懺悔**

挿絵:  
棒糖練乳

各作品ともに各電子書籍サイトにて好評発売中!

編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は  
公式サイトへ

キルタイムコミュニケーション

検索





正義のスーパーヒーローチームが帰ってきた！

二次元ドリームノベルズ

# サンダークラブス！

THUNDER CLAPSI REBORN

リボーン シリーズ

羽沢向一 挿絵：緑木邑

各電子書籍サイトにて  
シリーズ各巻好評発売中！

「サンダークラブス！リボーン」で検索！



本誌にて好評連載中！  
**大人気同人ゲームの  
単行本小説が  
電子限定で登場！！**

# 魔剣士 シネ2

乙女穢されし戦場

原作：まくらカバーソフト

小説：酒井仁 挿絵：桐島サトシ



**全3巻各電子書籍サイトにて好評発売中！**